



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ペ・エリ・ラヴロフ「歴史書簡」(翻訳)
Author(s)	松井, 茂雄; Matsui, Shigeo
Citation	スラヴ研究, 1, 71-118
Issue Date	1957
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/4926">https://hdl.handle.net/2115/4926</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112867.pdf



# 歴史書簡

ペ・エリ・ラヴロフ

松井茂雄訳

ビョートル・ラヴロヴィチ・ラヴロフ Петр Лаврович Лавров (1823—1900) はバクーニンと共に、ナロードニキ運動、特にその前期の革命的ナロードニキ運動に理論的指導者として大きな影響力をもった。70年代の「人民の中へ」の運動の時期を中心に、彼は「革命的ナロードニキの《思考の支配者 Властитель Дум》」(Очерки по истории философской и общественно-политической мысли народов СССР, т. II, стр. 391) であり、この時期には、いわゆるラヴロフ派 равристы がバクーニン派と並んでナロードニキ運動の主流をなした。このラヴロフ派に実践的な指針を与えたのは主に、ラヴロフがチューリッヒ(後にロンドン)で発行した雑誌「前進 Вперед」(1873—78)であるが、彼等の多くを最初に思想的に目覚めさせたのは、これより先彼が亡命前にロシアで発表した「歴史書翰 Исторические письма」であった。「この書翰は当時の進歩的青年層に大きな感銘を与え、多くの者にとって、生活と労働と斗争の新たな途をひらいた一種の福音書となった。」(Пушкарев, С. Г., Россия в XIX веке, стр. 266)

ラヴロフの文筆活動は50年代の末から90年代の末までの永きにわたり、彼の思想はこの間にかんがりの移り変りを示している。なかでも亡命後の彼の思想にマルクス主義が及ぼした影響は重要である。政治的にも彼は初期のテロ戦術否認の態度を後には改めて「人民の意志」党に接近している。従って「歴史書翰」だけからラヴロフの思想の全般をうかがうことは不可能である。しかし彼の最初の主著たる「歴史書翰」以後には少くとも、ラドハの指摘する如く、彼の思想には、部分的な動揺はあっても、根本的な変化は認められない。(«Ладоха, Г., Исторические и социологические воззрения П.Л. Лаврова», Русская историческая литература в классовом освещении, стр. 354) マルクス主義との接触も彼の世界観を変えてはいない。従って人は「歴史書翰」を読むことによってラヴロフの根本思想をほぼ誤りなく理解することができる。そしてこれはナロードニキの革命思想と革命運動の理解の前提となり、又その著しい折衷主義にもかかわらず、「その強い独特の個人主義」(Masaryk, T. G., The Spirit of Russia, V. II, p. 180) の故にナロードニキ主義の中にも全面的には解消することのできない彼の思想のいわゆるロシア主観主義社会学の建設者としての側面の理解をも助けるものと思われる。

「歴史書翰」は最初雑誌「週 неделя」に1868年から翌年にかけて連載された。ラヴロフは1866年のカラコゾフの皇帝暗殺未遂事件の後逮捕され、翌年危険思想の発表、危険人物(チェルヌイシェフスキーなど)との交渉などを理由に軍法会議で流刑に処せられたから、1868—9年には彼はカドニコフにあり、この論文もミルトフ Миртов なる偽名で発表された。「歴史書翰」の発表後ラヴロフはペテルブルクに召還され、1870年春にはパリへの脱出に成功するが、「歴史書翰」はこの年単行本として出版された。1872年ラヴロフは「歴史書翰」の新版を準備したが、これが出版されたのは約20年後の1891年のことであった。新版では部分的な改訂の他1881年に執筆した「進歩の理論と実践」に関する書簡が追加された。「歴史書翰」は1901年に独訳され、(Historische Briefe aus

dem russischen übersetzt von S. Dawidow. Mit einer Einleitung von Dr. Charles Rappoport), ラヴロフの著作のうち国外で最もよく知られているものである。

「歴史書翰」は次の 17 の書翰から成っているが、以下に訳載するのはこのうち 1—5 の 5 つの書翰で、残りはこの紀要の次号以下に連載の予定である。翻訳台本には第 2 版 (1891) を使用した。(鳥山)

- I. 自然科学と歴史
- II. 歴史の過程
- III. 人類に於ける進歩の意義
- IV. 進歩の代償
- V. 諸個人の行為
- VI. 文化と思考
- VII. 個人と社会的諸形態
- VIII. 成長してゆく社会的力
- IX. 社会的党派の旗印
- X. 理想化
- XI. 歴史における民族
- XII. 契約と法律
- XIII. 「国家」
- XIV. 国家の自然的境界
- XV. 批判と信仰
- XVI. 進歩の理論と実践
- XVII. 著者の目的

「附記」本稿は当スラヴ研究室に交付された文部省の科学研究費によるものである。

## 書簡其の一

### 自然科学と歴史

若し現代の思想の動きが読者に関心を抱かせるとすれば、読者の注目を惹く権利を直ちに要求するものは、その二つの部門即ち自然科学と歴史であろう。二者の中いずれが、現代生活により密接な関係を有しているか？

此の間に答えることは、恐らく一見して想像される程容易ではない。自然科学者及び大多数の思索する読者で、自然科学の方をとらうなどという気を起す者はないということを、私は承知している。事実、いとも容易に証明し得ることであるが、自然科学の諸問題は絶えず人間生活の中に入り込み、且つ又、力学・物理学・化学・生理学・心理学の多くの法則が実際に適用されなければ、人間は向きを変えたり、見たり、呼吸したり、考えたりし得ないものである。此に較べれば、歴史は一体何であるか？ 下らぬ好奇心の慰みである。個人或いは社会生活面に於て最も有用な活動家でさえも、曾てヘレニズムがマケドニアのアレクサンドルの軍隊と共にアジア諸種族中に滲透したとか、最も専制的な世界支配者達の時代に現代ヨーロッパの法律関係の原則とされる法典類・法規全書類・追加法律類等

々が編纂されたとか、最も粗野で動物的な衝動が熱狂的な神秘主義と共存していた封建制度と騎士制度の時代があったとかいうことを、想起する必要すら感じないで、一生を過して死んでゆけるのである。眼を我が国の歴史に転じて問うて見よう、古代英雄叙事詩やルースカヤ・ブラヴダの知識の中に、イワン雷帝のオブリチナの中に、或いはピョートルの行ったヨーロッパ的形態と古代モスクワ国家的形態との闘争の中にさえ、現代人の生活に適用し得る有益なものが数多くあるであろうか？ 此等は皆過ぎ去って返すよすがもない、而して新たな当面の諸問題が、あらゆる配慮と思考をもっぱら自分に向けるよう現代人に要求し、僅かに歴史のために残されているものといえ、多少劇的な情景つまり全人類的思想の多少とも明瞭な具体的表現に対する興味だけなのである…… 従って、我々の生活の各要素を説明する知識と**面白い**というだけの諸対象を説明するもう一つの知識との間——つまり思想の日々の糧と快よいデザートとの間には——恐らく比較すら成立し得ないのである。

自然科学が合理性的生活の基礎であることは、論を俟たない。自然科学の諸要求と基本的諸法則をはっきり理解していなければ、人間は最も日常的な自分の欲求や最も高遠な目的が皆目分らない。厳密に言えば、自然科学に全く縁遠い人間は、現代の教養人の名に全く値しないものである。然し人が一旦この見地に立った時、何が人間生活の利害に最も密接な関係を有しているかということが、問題になってくる。細胞の増殖とか、種の反復発生とか、スペクトル分析とか、双星とかに関する問題であろうか？ それとも、人智の発展法則とか、社会的利益の原則と平等の原則との衝突とか、民族的統一と全人類の結合の間の斗争とか、富裕な少数者の智的関心に対する飢餓大衆の経済的関心の関係とか、社会的発展と国家機構形態との間の関連とかであろうか？…… このように問題を提起するならば、知識的俗物共（その数は少くないのであるが）は除外するとして、第二の問題の方が第一の問題よりも人間により密接な関係を有し、より重要であり且つ日常生活により緊密に結びついているということを、認めない者は殆どないであろう。厳密に言えば、人間に密接な関係を有し且つ重要なものは、実に第二の問題だけなのである。第一の問題は、第二の問題を非常によく理解し且つ頗る適切に解決するのに役立つ限りに於て、人間にとって重要で密接な関係を有するに過ぎない。読み書きの利益とそれが人間の発達にとって絶対に必要であるということに関しては、何人も異論はない。然し、その中に何か独自の魔術的な力が存在していると考えてそれを弁護するような愚か者はあるまい。又、読み書きをする手続きそのものが人間にとって大切だなどと言うものもあるまい。この手続きは、人が読んで理解し、書いて伝達し得る思想を撰取する**手段**としてのみ重要なのである。読んでも何一つ理解出来ないような人間は、文盲と少しも異なる所がない。文盲とは、教養の基本的条件を欠いていることであるが、読み書きそのものは、全く目的ではなくて単なる手段に過ぎないものである。人間形成のシステム全般にわたって自然科学が演じているのは、殆ど此と同じ役割である。自然科学は単に**思想の読み書き**に過ぎない、然し発達した思想は、純粹に人間に関する諸問題の解決のために此の読み書きを利用する、而してこれらの問題が人間の発達の本質をなしているものである。本を読むだけでは足りない、それを理解しなければならない。全く同様に、発達した人間にとっては、物理学や生理学の基本的諸法則を理解し、蛋白質の実験或いはケプラーの法則に関心を抱くだけでは不十分である。発達した人間にとって、蛋白質は単に化学的な化合物であるのみならず、

無数の人間の基本的食物の一部なのである。ケプラーの法則は、遊星の遠心運動の公式であるのみならず、自然の諸法則の不変性及びいかなるものであるにせよ神の思召しとそれらが無関係であるということの全哲学的認識の摂取に向う途上に於て人間精神が獲得したものの一つなのである。

さて、自然科学と歴史の基礎が有している實際生活に於る相対的な重要性について上述した事柄と、全く反対のことを考察してみよう。蛋白質の化学実験とケプラーの法則の数学的表現は、**単に興味あるものにしか過ぎない**。所が、蛋白質の経済的意義と天文学の諸法則が有する不変性の哲学的意義は、**極めて本質的なものなのである**。外界の知識は、人間の心を捉えているあらゆる問題の解決に当って、是非とも頼らなければならぬ必要欠くべからざる資料を提供している。然し、此の資料に頼つて解決される諸問題は、外界の諸問題ではなくて、内界の諸問題即ち人間の**意識**の諸問題なのである。食物は、消化過程の対象として重要なのではなくて、**意識される**飢の苦しみを除去するものとして重要なのである。哲学的思想は、その論理的抽象性に於る精神の発達過程のあらわれとして重要なのではなくて、人間による高低様々な自己の**価値の認識**、広狭様々な自己存在の**目的認識**の論理的形式として重要なのである。即ちより良いより正しい社会機構を目指す現在に対するプロテストの形式、或いは現在に対する満足の形式として重要なのである。多くの思想家は、人間の思想の中に進歩を認めてきた、この進歩はひっきょうするに、最初自分をあらゆる存在するものの中心であると考えていた人間が、後に自分を外的世界の諸法則の例外なき適用をうけた無数の所産の一つに過ぎないことを意識したということにある、つまり人間が、自己及び自然に対する主観的な見解から客観的な見解に移ることに帰し得る。實際此は極めて重要な進歩であって、此なくしては科学の進歩はあり得なかつたし、人類の発展は考える事も出来ないものなのである。然し此の進歩は、最初の第一歩に過ぎないのであって、どうしても次の第二歩を踏み出さねばならないものである、即ちより良い正しいものとして主観的に認識し得るような人類の状態を達成するために、**外界の不変の諸法則を、その客観性に於て研究することが此である**。ヘーゲルが推測し且つ人間の意識の非常に多くの面で確認された偉大な法則が、ここでも確認される、即ち第三の段階は第一の段階と明らかに近似していたが、第一と第二の段階の間に存する矛盾の実際的な解決であったのである。人間は再び全世界の中心となった、然しながら、向自的に存在しているものとしての世界のためではなくて、人間によって認識されその思想によって克服され且つその目的に方向づけられた世界のためなのである。

然し、此こそ正に歴史の見地である。自然科学が人間に語る所のものは世界の諸法則であって、この世界にあっては人間そのものは殆ど目につかぬ存在であるに過ぎない、自然科学は力学的・物理学的・化学的・生理学的・心理学的諸作用の所産を悉く再検討する、そして全動物界に於る心理的諸作用の所産から**快苦の意識**を発見する、この動物界の人類に最も近い部門の中に、目的を立て且つその達成を志向する可能性の意識を発見する。自然科学のこの事実は、動物界に於る個々の生物の生活記録及び個々のグループの生活史の唯一の基礎である。科学としての歴史は、この事実を与件と見なして、読者に次のような事柄を展開して見せる。即ち人間が苦と意識するものを免れ且つ快と意識するものを得ようとする志向から人類の生活過程としての歴史が、如何にして生じたか。又この際快苦という言葉と結びついた概念に於て、つまり快苦の類別と段階に如何なる変容が生じたか、

これらの変容によってどんな哲学的思想形態と実際的な社会機構形態が生じたか、どのような論理的過程によってより良いより正しいものへの志向がプロテストと保守主義・反動と進歩を引き起したか、信仰・知識・哲学的表象の形に於る人間による世界の受け取り方と、個人の行為・社会形態・諸民族の生活状態に具象化されたより良いより正しいものの実際的諸理論との間に、各時代にどのような関連が存在しているか、がこれである。

それ故に、歴史家の仕事は、自然科学者の仕事の否定ではなくて、それらの不可避的な補足をなすものである。自然科学者を蔑視する歴史家は、歴史を理解していない、つまり彼は土台を置かずに家を建てようとし、読み書きの必要性を否定して教育の利益について語るものである。又歴史家を蔑視する自然科学者は、只単に自己の思想の狭さと発達の不十分さを証明しているに過ぎない、つまり彼は、目的の樹立とそれへの志向が、呼吸・血液の循環或いは新陳代謝と同じ位人間の本性に於て不可避的であり自然的事実であるということ、且つ又目的にはつまらぬものと高尚なもの、志向には貧弱なものと尊敬すべきもの、活動には愚かなものと合目的なものがあり得るということ、了解しようと欲しないか或いは了解出来ないのである。然し、目的も志向も活動も、常に存在してきたし、又常に存在するであろう、従ってそれらは、スペクトルの色・化学分析の元素・動植物界の種及び亜種と同じ位、正当な研究対象なのである。外界だけを問題とする自然科学者は、外界全体が人間にとって単に快・苦・願望・活動の素材に過ぎないものであるということ、又最も専門的な自然科学者ですら外的世界を研究するのは或る外的なものとしてではなくて、彼の活動に刺戟を与え彼の生活過程にとけこみ、認識過程によって認識され且つ学者たる彼に与えられる或る悦びとしてであるということ、了解しようと欲しないか或いは了解出来ないのである。歴史を蔑視する自然科学者は、人間は皆その上に家を建てるということを考慮に入れないで土台をきすいているものだと思っている、つまり彼は、人間の成長全体が読み書きに止まるものでなければならぬと考えているのである。

ところでここで、歴史家の仕事の学問的価値に対して若干見下すような態度を自然科学者に取ることを可能にするこの歴史に対する二つの争いがたい優越点を自然科学が有しているのではないかと、私に反駁するものがあるかも知れない。自然科学は正確な方法を作り出し、明白な諸結果を生み出し、且つ絶えず確証され、事実を予言することを可能にする不変の諸法則という資本を作り上げた。歴史に関して言えば、それが真に自分のものと言えるような法則を、せめて一つでも発見したかどうかはまだ疑わしい、歴史は只見事な諸場景を作り出したに過ぎない、そしてその予言の正確さに至っては天気予報と同一の段階に止まっている。これが第一の優越点である。第二の而も最も重要な優越点は、より良いより正しいものに対する現代的志向が、目的の明瞭な理解及び手段の正しい選択並びに当を得た活動の方向に於て、その資料を専ら自然科学の与件から汲み取っているということである、然るに歴史は殆んど有益な資料を提供していない、何故ならば、全く相反する生活理論に対して同様に美しい論証を供する程過去の諸事件の意義が不明確であるし、又時代の変遷とともに状況が完全に変化するので、いくらか以前の諸事件から引き出された諸結果をそれらが正しい時でさえも現代に適用することを極めて困難にしているからである。このように理論的科学性の面でも、実際的な有益性の面でも、自然科学者の仕事に劣っている以上、歴史家の仕事はそれと同列に置かれ得るであろうか？

ここに提起された問題を明らかにするためには、「自然科学」という言葉にどれ程の幅を

持たせるかということ、きめて置かなければならない。私はここで、科学の厳密な分類とそれによって提起されているすべての問題点を、念頭に置いているのでは決してない。勿論、自然的過程としての歴史は自然科学の領域に包含され得るし、又その場合には先に吟味した対比そのものも生ずる筈がないということは言うまでもない。私は以下ではすべて、**自然科学**という術語を、二種類の科学と解することにする。即ち、繰り返される現象及び作用の諸法則を研究する**現象的**科学と、観察される作用と現象をひき起す対象及び形態の類別を研究し、更にあらゆる観察される形態を知り且つ進化過程の諸段階に形態及区分を帰着させることを目的とする**形態学的**科学が此である。ここでは私は一連の形態学的科学にはふれずに、幾何学・力学・物理—化学的科学群・生物学・心理学・倫理学及び社会学を、一連の現象学的科学に属せしめるということに、意を用いよう。そして**自然科学**という術語に只今指摘した意義を賦与して、先に提起された問題に取り掛かろうと思う。

方法の科学性と独自性は、力学・物理学・化学・生理学に関する研究及び心理学の感覚理論に関する研究に於て、疑う余地は全くない。然し、個々人に於る表象及び概念の論及び個人の倫理学は、前述の自然科学の諸方法を、殆んど利用していない。社会に関する知識(社会学)、即ち社会的発展の過程及び所産の理論について言えば、物理学者・化学者及び生理学者の殆んどすべての手段は、ここには適用され得ない。この人間にとって最も重要で且つ最も密接な関係を有する自然科学部門は、既成の資料としての前述せる自然科学諸部門の法則に立脚していながら、違った方法で自らの諸法則を探求している。では一体どのような方法によってであるか？ 精神の現象学と社会学は、どこからその資料を汲み取っているのか？ ——それは、個々人の伝記と歴史からである。歴史家と伝記作家の仕事が非科学的であると同じ程度に、科学としての心理学の最も広汎な領域に於る心理学者の諸結論や、倫理学者・社会学者の科学的限界内に於ける仕事は、科学的であり得ない、即ち人間にとって最も密接な関係を有するこの部門では、自然科学は非科学的なもの認めざるを得ない。この部門に於る科学的成果は、知識の二領域の相互作用によって完全さに達するものである。伝記的歴史的諸事実の表面的な観察から、心理学・倫理学・社会学の凡その真理が得られる、この凡その真理は伝記及び歴史の諸事実のより一層意義ある観察を可能にする、それが今度は、歴史的観察のその後の完成を可能にする所のより近い真理へ導く、等々、つまり、改善された用具はより良い産物を作り、より良い産物は用具のその後の完成を可能にし、それが今度は産物のより一層の完成に働きかけてゆくのである。真の意義に於る自然科学にとって、歴史は全く必要欠くべからざる資料であり、歴史上の仕事に立脚してのみ自然科学者は人間の智的・道徳的・社会的生活の過程と所産を明らかにし得る。化学者は自己の専門を歴史より科学的であると考え、且つ歴史の資料を軽視するかも知れない。あらゆる自然的作用と所産の科学を《自然科学》という言葉によって理解している人は、その科学を歴史より高い位置に置く権利を有せず、従って又それらの密接な相互依存関係を認識しなければならない。

前述せることがら、實際的な有益性に関する問題を解決するものである。若し心理学と社会学が、歴史的諸事実の理解を高めるにつれて、絶えず完全なものに接近してゆくものとするれば、歴史の研究は、個人及び社会生活の諸法則を明らかにするためにどうしても必要欠くべからざるものとなる。それらの諸法則は、歴史の与件と同じ位力学・化学・生理学の与件に立脚している。歴史の諸与件に正確さが少いからと言って、それらの研究を

遠ざけるべきではなくて、反対に一層それを展開すべきである。何故ならば、歴史の専門家達は、その諸結論の正確さという点で、読者大衆に対して化学者や生理学者達が占めている程高い位置を占めていないからである。より良いより正しいものに関する現代の焦眉の諸問題は、精神の現象及び社会学に於る諸成果の解明を読者に要求している、然しこの解明は、経済学者・政治学者・倫理学者達の或る学派の説を信することによって、達成されるものではない。諸学派が相争っている場合には、誠実な読者は、諸学派の結論の基礎をなす与件そのものの研究や、教義の系統関係と学派発生の事象とによってその学説が明らかにされている所の諸学派の起源や、最後にそれらの発展に影響を及ぼした諸事件に、手をつけなければならない。然しながら、基礎科学の与件を除けば、これらは皆歴史に属するものである。歴史の研究をかえりみない者は、個人及び社会の最も重要な諸対象に対する無関心主義を示しているか、或いは、偶然最初に目についた実際の理論をいつでもすぐに信じ込んでしまうものである。かくして、最初に提起された問題——現代生活にとってより密接な関係を有するものは、自然科学であるかそれとも歴史であるかという問題は、私の考によれば、次のように解決し得る、即ち、自然科学の基礎的諸部門は、現代生活の全く欠くべからざる基底をなしているが、現代生活にとってより間接的な関心の対象である。自然科学の高度の諸部門、即ち個人及び社会生活の過程と所産の研究に関して言えば、このような研究は、理論的科学性並びに実際の有益性の点で、歴史と全く同一の段階にある。自然科学のこの諸部門が、人間にとって歴史以上に現下の諸問題と連関が深いということは争えない、然しながらそれらの本当の研究は、歴史の研究なしには全く不可能である、従ってそれらが読者に理解される程度は歴史が読者に理解される程度に過ぎないのである。

それ故に、現代思想の関心事は、歴史の諸問題、特に社会学の課題とより密接に関連している諸問題の詳細な検討である。私はこの書簡の中で、歴史の一般的な諸問題、即ち社会の進歩を条件づけている諸要素とか、社会的生活の様々な方面にとって進歩という言葉が有している意義を、究明しようとするものである。社会学的諸問題は、ここでは歴史的諸問題と不可避的に絡み合っている、加うるに我々が考察した如く、これらの知識の二領域が最も緊密な相互依存関係を有しているのだから尚更のことである。疑もなく正に此のことが、私のこの考察に、一層一般的で若干抽象的な性質を付与しているのである。読者がここに見出すのは、様々な時代に於る諸事件の場景ではなくて、それらの諸結論及び比較対照である。歴史から取った物語も少なからずある、私は多分後でこれらの物語にも言及できると思う。然し、歴史の諸事実はそのまま変らないが、それらの意義は観点によって変る、過去を解釈するに当って、時代時代によってその時代の関心と発展をその解釈の中に持ち込むものである。かくして歴史的諸問題は、各時代にとって過去と現在の結び糸になる。私は読者に私の見解を押しつけるのではなくて、私が諸事実を理解する通り、つまり、私にとって過去が現在に反映し現在が過去に反映しているそのままを読者につたえようとするものである。

## 書簡其の二

### 歴史の過程

《歴史》という言葉の別の意義の考察にとりかかろう。

第一の書簡では、人智の領域としての歴史が論点になっていた、今度は、知識としての歴史の研究対象をなす過程としての歴史を考察しようと思う。過程としての歴史、即ち一連の他の諸現象中に於る現象としての歴史は、その特殊性を有していなければならないし、又事実有しているのである。それらの特殊性は何にあるのか？ 歴史的現象は、思索する人間の眼には、石の落下・腐敗しつつある液体の醗酵・消化作用・何らかの水生动植物養殖器中で観察される種々の生命現象と、どんな風に違って見えるか？

私の問は奇妙に思われるかも知れない、何故ならば、歴史的過程は、人間・民族・人類によって実現され、且つ歴史的過程と他のすべての過程との十分な相違は実にこのことにあるのだということ、どの読者もすぐに思い浮べられるだろうからである。然し、これは全くその通りだというわけにはゆかぬ。第一に、地質学者は土壌の歴史に関して、又天文学の理論家は宇宙の歴史に関して語る若干の根拠を有している。第二に、人間や民族におけるすべてのものが歴史的な生活過程に入るとは到底言うことができない。最も重要な歴史的諸人物の日常活動の中には、いかに綿密な伝記作家と雖も、決して書き留めなかったし又決して書き留めないであろうような多くのものが存在している、それは恰も多数の人間の生れてから死ぬ迄の生活が、研究者にとって何等の重要性を有していないのと同様である。社会生活の面に於ては、歴史家は毎日数学的正確さで繰り返される諸現象を書き留めなくて、変化するものだけを記載するのである。大抵の歴史家達は、全人類の中から若干の民族と若干の種族だけを歴史的なものとして選り出し、残り的人类全体を人種誌学・人類学・言語学、要するに、歴史以外の任意の科学の役目に任せる。彼等は、**或る**点で正しい。これら諸民族の生活に関する科学の諸問題及びそれらについての思惟方法は、動物学者が所与の種類の鳥や蟻に関して取扱う所のものと、全く類似している。動物学者は、これらの動物の解剖学的特殊性や習性・巣を造ったり蟻塚をきづいたりする方法・他の諸動物との斗争等々を記述する。人種誌学者にも同一の諸問題が提出されている。実際に人間の諸機能はより複雑であり、一層詳しく記述しなければならない。言語学者は、言語の表現方法だけでなく語の意義まで知っているが、動物学者とて若し出来ることなら、どれかの音の変化の意義を鳥から知りたいのは山々なのである。人類学者は、知識・職業・用具・神話・習慣を書き留める、然し彼の問題は、所与の諸事実があるが**ま**まに書き留めるといふ動物学者の問題と同じなのである。人類学者の研究の諸対象が、我々にとって一層興味があるのは、我々は人間を研究するだけでなく、彼等に対して一層親近感を感じているからである。然しこのことから、適用される方法の科学的意義に関して誤った判断をしてはならない。人類学者は、人間を研究対象に選んだ所の自然科学者である**だけ**なのだ。彼は、**あるが**ままのことだけを記述するのである。

ところで私は、諸民族及び諸種族を歴史的なものとしてと非歴史的なものとしてに区別する歴史家達が**或る**点で正しいということ、述べて置いた。事実、この区別の正確さを幾分疑わしいものにするところの他のものもある。ある島の住民達が、百年の歳月を隔てた二人の旅

行家によって同じように記されるような不幸な島は、よもや存在しまい。この住民達は、二つの時代の間に経過した生活期間中に**変化した**のである。この変化は非常に一般的であるから、それに関して情報が存在しない所にも、科学はその変化を仮定する完全な根拠を有している、それ故に、人類学者はある種族に関する自己の研究に、種族文化が時流の中でいかに変化したか、いかにして生じたかに関する多少とも仮説的な指摘を、常につけ加えている。然し歴史家は、これらの諸問題を自己の領域に入れる若干の根拠を有する。現代に於ては、既に有機物の世界全体の歴史についても語る事が出来る、何故ならば、変種説の見地からすれば、各々の有機的形態は一般的な有機的発生のモメントとしてのみ意義を有しているからである、然しこの場合形態発生そのものは、現在までの所では、観察される事実としてではなくて、科学的説明としてのみ示されている。ところで科学が問題にするのは、系統的な分類を要する所の有機的諸形態の類別だけである、而して個々の場合は、一般的な過程の研究という意味に於てのみ重要性を有している。個々の場合は、研究の手段に過ぎない。何等かの諸条件の下に於る個々の形態の出現は、所与の環境諸条件とその際出現する諸形態との間の依存関係の諸法則を研究するという意味に於てのみ、重要性を有するのである。加うるに、有機的諸形態の変化現象中で最も研究の行き届いた部分をなしているのは、人間の影響下に於ける動植物の変化である、而してこれは最早人間そのものの歴史の領域中に含まれるものである。

もちろん、動物学の分野には、歴史家が研究する所のものと著るしく類似した諸現象が存在している。それは——諸動物の有する習性の発達と変化の現象である。現在までの所では、このような現象が実現されねばならなかったし、又実現されてきたし実現されているということを、結論することだけが可能なのである、然し動物学者はまだその様な現象をその実現過程の最中に何一つ観察し得ていない。あらゆる文化的な動物が、歴史に類似したあるものを**有してきた**ということ、或いは少くとも、彼等にとってその文化形態の一連の変化が時の流れの中に存在していたということは、大いにありそうなことである。例えば、今日の蜂の共同生活体が、より単純な共同生活体から生じたというのは大いにあり得ることだ。脊椎動物にすら、主として新しい環境諸条件に適応するための習性の変化が観察されたのである。然し蜂の《歴史》は、複雑な文化を有するあらゆる無脊椎動物の《歴史》と同様に、科学的観察の範囲外にある。新しい環境諸条件の影響を受けた脊椎動物の習性中に観察される所の変化は、殆ど歴史の事実にならない、それは、新しい風土の諸条件の中に住み着く移住者の植民地で不可避免的に生ずる所の住居の建造とか衣服とか食物そのものとかの変化が、殆ど歴史に含まれないのと大して変らない。科学が提供するままの動物学者の世界は、恒常的に繰り返される諸現象の世界である。それ故に、現在までの所では、思弁のみが人間の歴史との類似を動物の歴史に転置し得る、然し実際には歴史は人間だけを対象にしている。

反復継起のすべてを含む現象を包括する法則を、其の他すべての過程の中に、研究者は探求する、——繰り返される現象の法則ではなくて、生ずる変化それ自体が重要性を有しているのは、只歴史的過程の中だけである。所与の結晶体に興味を抱くのは素人の観察者だけであって、鉱物学者は、歪められた畸形的諸形態を、厳正な幾何学的諸法則に従う不変の類型に帰せしめる。所与の解剖学的異常は、解剖学者にとって、ある機関の正常な機構がどれ程の偏差限界間にあるかを示すべき法則を、樹立する手がかとりなるに過ぎない。

ところが、人間の個人的或いは社会的な生活諸現象は、実に二重の意義を有しているのである。

カスパル・ハウゼルは、ニュールンベルクの街頭に突然姿を現わし、五年後に斬り殺された\*。ケプラーは、遊星運動の諸法則を発見した。北アメリカの内乱は、アメリカに於て莫大な人間と富の損失を招き、ヨーロッパに於て経済的危機をひき起した。我々は、これらの諸事件から何を学ぶであろうか？

\* 現在、殊にロシアの読者の中には、カスパル・ハウゼルを記憶しており且つどんな人間であったかを知っている者は恐らくいないであろうと、或る友人が私に注意してくれた。これは全く尤もなことであって、寧ろ外の例を挙げた方がよかったのであるが、私は注釈を施すことによって論題を補正した方がよいと考える。1828年、ニュールンベルクの街頭に農民姿の一青年が姿を現した、そして彼が捨子であり、1812年10月7日に生まれ、読み書きを習得しているという説明書きを所持していることが判った。彼の奇怪な挙措動作は、研究を促すに至った。彼がそれまでの全生涯に見たのは彼の養育者一人に過ぎず、パンと水だけで地下室に暮し、且つ自分の養育者を知ったのは解放されるほんの一寸前のことだったということが、明らかになった。若しハウゼルの言を信用すれば、それまでその未知の人間は、彼が寝ている間に食物や衣服を取り換えていたのである（恐らく食物に催眠剤が入れられていたのであろう。ハウゼルに認められる神経錯乱と顔及び体の痙攣はその所為であろうと思われる）。最初この不幸な青年は、都会の閑人達の好奇心と乱暴な試験の対象になり、少なからぬ苦難をなめた。その後、多くの著名な人々、特にアンセルム・フォイエルバッハ（哲学者フォイエルバッハの父、有名な法律家）が、彼に関心を寄せた。カスパルは、社会から隔絶されて生活してきた大人の赤ん坊の珍しい实例として、興味深い心理学的研究の対象となった。然し、一層大きな興味を喚起したのは、彼の出生に関する問題である。探索は悉く徒勞に終わった。カスパルに関して特別な一書を刊行したA・フォイエルバッハは、1828年にバヴァリア公妃（バーデン家の出）に秘密の文書（現在印刷になっている）を捧げた、その文書には、カスパルが確かにチューリングゲン一門のバーデン家男系の最後の代表者であって、ハイエル・フォン・ハイルベルク家の出で身分不相応な結婚をしたV・G・カルル・フリードリッヒ夫人が自分の息子レオポルトに王位を継がせるためにこの代表者を遠ざけたということが、証明されている。フォイエルバッハは、1824年に野心に燃えたカスパルの迫害者が死んだことによって、彼の解放を説明している。1829年に不明の人物によって、カスパル殺害の試みがなされた。A・フォイエルバッハは、1833年5月29日に死んだ。同じ1833年の12月17日に、カスパル・ハウゼルが斬り殺された。犯人は逮捕されていない。カスパルの出生は、依然として不明である。（1889年。最新の諸研究によれば、最も確かなところ、カスパル・ハウゼル事件は何等政治的な意義をもたなかったものごとくである。然し、私は本文の記述を変えない方がよいと考えたのである。）

心理学者にとって、カスパル・ハウゼルは、成人してから社会に入った人間の珍しい例として、又心理的諸現象の若干の**一般的法則**を研究する上に外の人間より一層都合のよ

い例として、意義を有している。伝記作家と歴史家にとって、カスパー・ハウゼルは、所与の時代の特殊な現象であり、ただ一度組合わされた諸情況の奇妙な総合の結果である、これらの諸情況が存在していたために、この謎めいた人物は 17 歳まであらゆる社会関係から切り離され且つ 5 年後に殺人者の手にかかったのである。アンセルム・フォイエルバッハが、彼をチューリングン一門の最後の代表者と推定していた時に、彼が研究していたのは、繰り返されるものではなくて、**唯一の**歴史的现象である。

全く同様に、ケプラーの発見の過程は、論理学者にとって、科学的思惟の**一般的諸法則**の例に過ぎない。成程ミルとヒューエルは、この過程が真の帰納の典型であるか否かを論争したことはあった。然し、歴史家にとって、これらの発見は、繰り返される可能性を有しないただ一度の事件である、何故ならば、この事件は、17世紀初頭に於る社会的発展の先駆的な科学的諸発見の複雑極まる総体によって、又この時代のドイツに於る諸事件の特殊性及びケプラーの伝記の一層大きな特殊性によって、条件づけられているからである。然し、この事件が起るや否や、それは新たな智的発展の要因となったが、その過程は二度と再び繰り返され得ない、何故ならば、それは、科学的・哲学的・宗教的・政治的・経済的諸要素及び偶然的な伝記的要因等が交錯した結果だからである。

社会学者は、北アメリカの内乱に関連した現象群の中に、社会的生活の様々な領域に於る**一般的諸法則**のための幾多の例を、同様の方法で見出すであろう。しかし、歴史家は、この複雑性をはらんだ現象群を、ただ一度観察され而もその不可分性と複雑さの故に二度と繰り返され得ない所の特別な現象と見るであろう。

これらの歴史的諸現象は、個人に於る心理現象・個人の集団に於る経済現象・諸民族に於る政治形態或いは理想的憧憬の不可避的交替等の、恒常的法則を確立するための資料となると同じ程度に、心理学・社会学・個人或いは社会精神の現象学にとって、つまり人間に適用される自然科学諸部門の一つにとって関心事である。然し、それらは歴史家にとって、不変的法則の諸実例ではなくて、一度だけ生じた変化の異色ある諸特性なのである。

前述のことがらは、二つの見地から反駁されるかも知れない。歴史理論家達は、私が科学としての歴史の要求を理解していないと言うであろう、即ち、歴史はあらゆる科学と同様に不変的法則を探求し、且つ歴史的進歩の諸事実は、歴史家にとってこの進歩の一般的法則を彼に明らかにする限りに於てのみ重要なのであって、諸事実それ自体は何等の重要性を有していない、又諸事実に意義を与えることは、平凡極まる歴史家共が現在でも歴史の理想としている所の悲劇的或いは喜劇的な絢爛華麗な諸場景の万華鏡に歴史を変えることを、意味するものであると。又上述の中に、人間のみが歴史を有し、且つ史上の諸事件は繰り返されるのではなくて絶えず新しいコンビネーションを生ずるといふ使い古された思想の反復を認める読者もあろうが、それは或程度当たっている。

後者には私は、自分の思想が新しいものだと主張しているのではないといっておこう。然し、時には古いことを想起させるのも悪くはない、そして**この**古いことを想起させたいと思ったのは、実に**歴史的**法則という言葉の意義に関する考え方に最近若干の混乱が生じたからに外ならない。例えば、バックルの多くの追従者達は、彼が若干の歴史の法則を発見したと語っている。私はここで彼の諸発見の正しさを、是認或いは否認しようと思っているのではない、然し、それらがどのようなものであるにせよ**歴史**の諸法則に関係のあるものではない。彼は只、歴史の**助けをかりて**社会学の若干の法則を確立しただけであ

る、換言すれば、歴史上の諸事例を参照して、或要素の優越がいかに社会の発展一般に影響するか、又若しこの優越が繰り返されるとすれば、それが常に作用するであろうかを、決定したに過ぎない。これは、ヴィコー、ボッシュエ、ヘーゲル、コント、デュシェがこの種の法則の確立を理解していた如き、歴史的進歩の法則では全くないのである。

歴史理論家に関して言えば、私は彼等が二つの点で私に同意するであろうと考えている。第一の点は——ヴィコーのように歴史を繰り返される諸現象の過程に帰しようとした思想家達のあらゆる試みは、問題が細部にわたる二時代の比較に及ぶや否や、頗る効果のないものとなるということである、従って歴史は次のような過程をあらわすことになる、即ちその過程に於ては、所与の総体として**一度だけ**歴史家に提示された諸現象の一貫せる関係を過程の各瞬間に於て決定することが要求される、その様な過程である。第二の点は——全体としての歴史の一貫性の法則は、まだ発見されていないが探求されているということである。若しそうとすれば、——探求しよう。

先ず第一に、**歴史の法則**とは何かという問題の意味そのものを明らかにしなければならない。——先に言及した自然科学の二系列に於ては、**法則**という言葉は非常に異った意義を有している。現象学的科学に於ては諸現象の法則は、諸条件——それらの下で諸現象が一定の秩序で繰り返される場合の諸条件——を方式化するものである。歴史に於ては現象は繰り返されないのであるから、法則という語のこの意義は歴史に全く適用されない。この同じ法則という言葉は、形態学的科学では、多少とも密接に関連したグループに形態及び対象を類別することをあらわしているから、全く異った意義を有している。この意味に於る**法則**という言葉は、例えば、天空に於る天体の配置法則が問題となる場合の星学、或いは有機体の類別法則について語る場合の有機体の分類学の中に、見出される。この意味に於る法則という言葉は、それが時の流れに於る諸事件の系統的分類を意味するならば、歴史にも適用できるのである。

然し、形態の何等かの類別法則を見出すこと或いは理解することは、何を意味しているのか？ 形態学的科学の中只一つのもので、この問題に対する解答を我々に与えてくれる、ここでは形態の類別は、我々にとって全く明瞭である。それは——個体の形態学である。我々は、胎生学及び発育論の助けをかりて、組織・器官・有機体の発生を、非受胎卵の基礎細胞から胚子・胎児・仔の全発展段階を経て現に観察される段階に至るまでを吟味する場合に、生物の正常な解剖学的構造並びに畸型的な解剖学的構造を**理解する**。解剖学的形態の類別は我々にとって明瞭である、何故ならば、それは力学的・物理—化学的・生物学的諸現象の総体に外ならぬ有機的発達によって条件づけられた一貫せる類別の全系列に於る単一のモメントであるからである。

他の或る形態学的科学に於る我々の知識は、それ程進んでいないし、我々の理解はそれ程明瞭でない。然し、我々が理解しているものを、我々は正に同じ方法で理解するのである。私が言っているのは、地質学のことである。鉱層及び鉱物の類別は、地球の発生の結果生じた地史の痕跡としてのみ、我々に理解され得る。換言すれば、地球に於る力学的・物理—化学的諸法則の絶え間ない作用の一連の所産中の一つとしてのみ、理解され得る。

其の他の形態学的諸科学に於ては類別法則を理解する事は、若しもその発生が我々に解り得さえすれば、同様に**形態発生**を解明する事に外ならぬものであろう。そういう条件がみたされない中は、我々は綿密な観察の方法によって、純粹に経験論的な法則として

類別の法則を次第に多く知りはするが、これを**理解する**ということはないのである。例えば、望遠鏡の可視度が増大するにつれて新しい天体群が天界にあらわれてくると、天体の分布の法則は変化するか或いは一層正確になる。生物の形態学に於る事実的知識が増大するにつれて、生物の分類法則は一層明確になる。然し、我々が宇宙の物体の**発生的**過程を充分詳細に知り、且つ観察する諸星群をこの過程の発展諸段階に属せしめ得る時にはじめて、我々は天体の類別法則を**理解している**と言えるであろう。天文学に於てこのことはまだ試みられてさえいない、それ故に諸星座の分布は、現在までの所経験論的記述の対象に過ぎず、科学的な理解と言い得ないのである。有機体の類別に関する科学的理解の時期は、有機的世界一般の発生を見出そうとする最初の試みと共に始った。ダーウィンの理論は、この面で巨大な一步を踏み出すことを可能にした、そして現在、生物の分類法則は、完全に科学的な課題となっており、この法則を理解することは——有機的諸形態をそれらの発生的関係に帰することを意味している。茲で考察した二つの場合に於る類別は、最初の中は無秩序で殆ど出鱈目と言ってよい程で、それは、大空に星を撒き散らしたり、奇妙にも様々な生物を作ってたわむれている勝手な行為者が存在しているという観念を、原始人の間に極めて容易に抱かせた程であった。科学的理解では、この類別の発生は現象学的諸法則の作用の結果と見なされている、この際諸現象は絶えず繰り返される、然し現象学的諸法則は、一定の環境で作用しながら、宇宙空間に於る益々新しい物質の類別を生ぜしめ、地球上に於る益々新しい生物の類別を生ぜしめている。物質の形態学は、空間に於る（力学的）物質の類別、及び組成の多様性による（化学的）物質の類別の一貫せる変化の法則を含まなければならない。生物の形態学は、現在ではもはや、ヘッケルが解釈しているように、常に作用する生物学の諸法則に基いて生物類別の一貫せる変化の法則を発見することを課題としている。

これら諸科学の類似点から、歴史の法則を見出し且つ科学的に理解することが何を意味するかは、容易に結論し得る。ここでは我々は、発生がそもそもの初めから提示されているという利点を有している。星座及び星雲の無秩序な配置、或いは多種多様な生物に於る場合のように、ここでも皮相な観察者には、最初は雑多な諸事件の群しか見えない、然し前の場合と同じように、歴史に於ても諸事件の発生的関係及び**重要性**による系統的分類が極めて急速に開始される。

諸現象の関係を明らかにする場合には、形態、対象或いは事件の類別を明らかにする場合と同様に、第一步は常に最も重要なものをより重要ならざるものと区別することにある。現象学的科学に於てこれをなすことは、自然科学者にとって容易である、即ち、恒常的關係で繰り返されるものがより重要なのである、何故ならその中にこそ法則が存在しているからである、偶然的な変容に属するものは取るに足らないものであって、将来の考え得る比較対照のために参考にされるに過ぎない。恐らく、同じ屈折環境で**完全に**同一な光の屈折度を見出したり、**全く**同一な化学分析の結果を得た研究者は一人もあるまい、然し彼は、試験の偶然的な諸偏差を切り捨てて、それらによって繰り返される現象の不変の法則を発見したのである。このことが、**唯一**重要なことなのである。——形態学的科学に於て事実の重要性を決定するものは、何であろうか？ 我々が先に考察したように、形態学的科学に於ては形態の類別法則の理解は、この類別の**発生**を条件づける所の現象学的諸法則の絶えざる作用を明らかにすることと一致している。明らかに、形態の類別法則の最上

の理解を助ける所の要素、即ち現象学的要素が、ここでは何より重要なものになるであろう、例えば、太陽系が天文学者達によって他の諸系と区別されるのは、それを構成している諸天体が引力の法則に帰せられる力学的諸現象によって結ばれているからである。全く同様のことが、二重星或いは三重星の星系を独立させている、我々は記述的化学に於て、全く同様にカリウムとナトリウム或いは塩素とヨードを、それらの化学作用の類似によって同属関係に置き、又化学成分及び結晶学的現象の類似によって諸鉱物を同属関係に置くのである。現象学的諸科学の法則は、形態学的科学の類別に於て何がより重要で何がより重要でないかを決定するものである。この決定のためには、所与の類別の際に作用する現象学的諸法則、殊に類別そのものとその発生に最も大きな影響を与える所の現象学的諸法則を考慮に入れなければならない。

いかなる現象学的諸法則が、人間の歴史に於る諸事件の類別とそれらの発生に影響を与えているであろうか？ それは、力学・化学・生物学・心理学・倫理学・社会学等の諸法則、即ち**あらゆる**現象学的科学の諸法則である、従って——それら全部を考慮に入れることが**必要であり且つ科学的である**。それらの諸法則の中で、どれが歴史の理解のために特に重要なものであろうか？ そのためには、歴史の唯一の手段であり且つ唯一の対象である人間を形成している実体の特異性を考慮に入れなければならない。化学的生成物が植物学的分類によって説明できないように、電気ウナギは特殊な電氣的諸現象の故を以てその動物学的グループから分離され得ない、これら二つの場合は、共に生物学的諸現象が最も重要な指標となっているからである。同様、人間に関する諸科学全部にとっても最も重要なものの規準となるものは、人間の特異性に応ずるものでなければならぬ。所がこれらの特殊性は当然人間の**主観的**評価によって決定される、何故ならば、研究者自身が人間であり、且つ一瞬と雖も**人間にとつて**特有な諸過程から分離され得ないからである。

恐らく（それどころかかならずや）世界の全体的構成の中で意識現象は極めて第二義的なものであろう、然し、それは人間にとって非常に圧倒的な重要性を有しているので、人間は常に先ず第一に人間及びそれに近いものの行為を、**意識的行為と無意識的行為**に別ち、この二つに対して異なった態度を取るであろう。意識的な心理的諸過程・信念によるか或いは信念に反する意識的活動・社会的生活への意識的参加、或る政治的党派の陣列に於る或る政治的変革のための意識的闘争、——これらはいずれも、人間にとって、同様な状況に於る無意識的活動とは全く異なった意義を有しているし、又常に有するであろう。従って、歴史的諸事件の分類に於て、意識的諸作用は、人間の意識そのものの中に存在している諸作用の序列中で首位を占めるものでなければならぬ。

この意識に基づいていかなる諸過程が諸事件の発生に優越した作用を及ぼしているだろうか？ それは、人間の欲求と志向である。これらの欲求と志向は、個人の意識に対する関係に於てどのように分類されるだろうか？ それらは三つのグループに別けられる。欲求と志向の第一のグループは、ある不可避的なものとして人間の身体的心理的構造から**無意識的**にあらわれ出るものであって、人間活動の既成の要素をなす時のみ意識される。第二のグループは、個人を取りまく**社会的環境**から、或いは習慣・伝承・習俗・実定法・政治的区分等一般に**文化的諸形態**の形で祖先から、同様無意識に個人が受けとるものである、これらの文化的欲求と志向は、個人にとって全く不可避的であるとは言えぬ或る**与件**として**既成のもの**に依って意識される。それらの中には文化的諸形態の発生に当って存在

していた或る意味が予想され、研究者達はこの意味を探求し推測しているのであるが、所与の時代に所与の文化諸形態の中で生活していた各個人にとって、この意味は各個人の意識と無関係な或る外的なものである。最後に欲求と志向の第三のグループは、全く**意識的**なものであって、各個人にとって少しも外的強制を受けずに自由独自の意識の所産として、個人の中にあられるものである。一つには、利己的な利害及び身近な者の利害に関する意識的考量に基づく所の活動の分野である、二つには——歴史的進歩にとって遙かに重要なものであるが——より良きものの欲求・知識を広め高い目的を立てようとする志向、自己の願望、理解、道徳的理想に応じて外部から与えられた一切のものを変革しようとする欲求、真理の要求する所によって考え得る理想の世界を打ち立て、正義の要求する所によって眞実の世界を打ち立てようとする志向等である。科学的研究の結果、この第三のグループも人間の中で自由独自に発展するのではなく、周囲の環境及び彼の個人的発達の複雑な諸影響の下に発展するものであるということ、人は確信している。然し、人間が**客観的**にこのことを確信していても、依然として彼の意識の中に存在する幻想を主観的には取り除くことが決して出来ない。この幻想が、批判的に目的と手段とを吟味しつつ彼**自身**がその為めに目的を立て手段を選択する所の活動と、彼が自分を外部から与えられた或る道具として意識している機械的、感性的、習慣的な活動との間に存する巨大な相違を、彼のためにつくっているものである。

上述の三つのグループは、人間に関するあらゆる科学の中で彼にとって最も重要な現象学的過程に基づいて相互に区別される、従ってこれらのグループは**科学的に**確定される、而して歴史の諸事件の分類にとってそれらが有している意義は、意識過程に対するそれらの関係から必然的に生じてくる。最も意識的であるグループは、人間たる歴史家にとって彼個人の本性によって不可避免的に圧倒的な重要性を有しているが、同様にしてこのグループは、人間の歴史にとってもこの歴史の本質上圧倒的な重要性を有していなければならぬ。合目的な意識的活動は、問題の提起の点で中軸をなし、而してこれを中心にしてその他多くの人間活動のあらわれが群り存在する。それは丁度、人間が達せんとする種々の目的が、大部分の人間にとっては——個人の最大の利害に応じて、又最も発達した個人にとっては道徳的価値に関する彼等の考え方に依りて、相互に従属関係に立つのと全く同じである。立論の科学性は、ここでは等しく主観的な二過程の合流の結果得られるが、その過程の一つは歴史家の思想の中で、他の一つは歴史的個人と集団の観察の結果として得られる。歴史的諸事件の発展法則は、この見地からすれば一定の研究対象となる。故に、各時代に於ける最も発達した個人によって最高の目的、真理、道徳的理想として意識された所の知的、倫理的目的を把握しなければならぬ、このような世界観、それを創造した批判的及び非批判的思考過程、並びにその連続的変容等を生ぜしめた所の諸条件を明らかにしなければならぬ、それらの歴史的、論理的連続性の中にかくして発生した種々の世界観を分類しなければならぬ、又それらを中心にして其の他の一切の人間の歴史の諸事件を、原因と結果、促進的なものと阻害的なもの、典型と例外として配置しなければならぬ。そうして始めて、研究者は、種々雑多に見える諸事件の絢爛たる万華鏡から歴史的一貫性の法則へ、不可避免的に移行する。

この立論に当って主要な研究対象と手段はすべて、主観的な世界に属している。どの時代にも個人及び個人の集団が追求した種々の目的は主観的である、彼等の同時代人達がこ

これらの目的を評価する際により所とした世界観は主観的である、歴史家が所与の時代の諸世界観に対して彼が重要且つ最高と考えるものをそれらの中から選択するために付与する所の評価は主観的である、又人間の歴史に於ける進歩の度合を規定し、進歩的諸時代と反動的諸時代並びにそれらの歴史的発展段階の原因と結果を指摘し、且つ同時代人に現在可能なものや望ましいものを指示せんがために、歴史家が世界観の全系列に付与する評価も主観的である。然し、これらの場合に於ける主観性の起源は様々であり、又この方法の結果起るかも知れない誤謬を除去する為の諸方法も様々である。所与の時代に於ける個々の諸目的とそれらの道徳的評価の主観性は、最も多面的な観察と研究に値する全く不可避的で且つ科学的な事実である、歴史家は誤謬を避けるためには、頗る綿密な方法で所与の時代に於ける文化的環境と個人の発達段階を理解しなければならない、ここでは彼はあらゆる他の科学に於けると同様に諸事実を蒐集し、個人的な彼の諸見解は、それらの諸事実の設定に殆んど関与させないか或いはさせてはならない。若し彼がセン・ウストレト或いはティムールにルイ十四世或いはビスマルクの複雑な外交的考慮を容認するとすれば、彼は自分の論じている時代を全然知っていないことになる。若し彼がヘラクリトスの思想の中にヘーゲルの弁証法を挿入するとすれば、更に彼は二時代の区別を十分了解していない。若し彼が歴史に於ける優越的意義を文化現象、国家の拡大、諸国民の斗争に付与するとすれば、彼は人間の本性の特異性を人間自身がそれを意識する様には解っていないことになる。科学的知識が正確広汎で多面的であることは、これらすべての場合に誤謬を除去するための最良の手段となる。然し、所与の時代に於ける種々の世界観の客観的評価、或いは歴史家によって樹立される歴史的進歩の理論は、全く問題が別である。ここではいかに正確な博覧多識と雖も、若しも著者が誤った理想を立てるならば誤謬を除去し得ない、ここでは歴史家個人の独自の発達が反映され、彼は自己の立論により以上の正確さを付与する手段を、自分自身の発達についての配慮の中にしか見出し得ない。人間は、彼自身が到達した道徳的達成を、意識的或いは無意識的に人類の歴史全体に適用するものである。或る者は、強大な諸国家の形成或いは崩解を促進したものだけを、人類の生活の中に探求している。第二の者は、主として諸国民の斗争・努力・滅亡などを注視する。第三の者は、勝った国が常に負けた国より正しいということ、自己及び人々に確信せしめんと努める。第四の者は、諸事実に関心を寄せ、且つ人類にとって絶対的善であると彼が考えている理想を、それらがどの程度実現したかに関心を抱く。彼等は皆、自己の道徳的理想観によって主観的に歴史を判断するのであって、それ以外の方法では判断出来ないのである。

歴史家は何等かの事件の影響を受けた人間の教を考慮に入れることによって、事件の重要性を判断するための客観的規準を得ることが出来るなどと、読者は考えないがよい。アウグスティヌス或いはボッシュエにとって、小パレスチナの住民に影響を与えた諸事件の方が、ジンギスカン或いはマケドニアのアレクサンドルの諸遠征よりも、遙かに重要であったと同様、現代の歴史家にとっては、蒙古人による巨大な中国帝国の征服は、思うにスイス山地の若干の連邦諸州対ハプスブルク家の斗争に比べて、重要性ははるかに少ないであろう。勿論、若し諸事件が直接的に影響を与えた人間全体のみならず、教世代の生活と思想がこれら諸事件によって制約された所の一連の世代をも考慮に入れるとすれば、人間の教の多さを規準とすることはここでも可能である。然し、このような場合歴史家と思想家は、極めて屢々謬想の影響を蒙るものである。彼が自己の主観的な道徳的見解では最も重要で

あると考えているものでも、人類の其後の運命に極めて間接的な影響しか与えなかったと彼に思はれることもある。ある著者は、新らしいヨーロッパの精神文化に、かつてガリレオの脳裡に成長した教説の支配的影響を見出し、且つこれに比してギリシヤ哲学諸派の影響が瑣々たるものであったと主張するであろう。又ある歴史家は、全く相反する命題を同様に断乎として主張するであろう。

かくして、好むと好まざるとに拘らず、歴史の過程は主観的に評価されることになる。換言すれば、自己の道徳的発達の程度に応じて何等かの道徳的理想を体得した後、歴史のあらゆる事実がこの理想を促進或いは阻害したことを示す一つの展望の中にそれらの諸事実を配置し、且つこの促進或いは阻害が最も明瞭に表現された諸事実を歴史にとって最も重要なものとするようになるのである。然し、更に二つの重要な事柄がここにあらわれる。第一は、この見地からすればあらゆる現象が、有益なもの或いは有害なもの、道徳的善或いは悪に別けられることである。第二は、歴史過程の展望を決定する所の道徳的理想の保持者たる我々自身は、この過程の最後に位置しており、それ以前のすべては我々の理想に対して、不可避免的に一定の目的に導く準備的諸段階の關係に立つということである。従って、歴史というものは、有益な原理と有害な原理との斗争と考えられ、有益な原理が、変ることなく或いは次第に発展しながら、終には我々にとって人類の最高善と考えられる地点に到達したものと云える。然し、有益な原理が、必ず実際に勝利しなければならないということではない。又、あらゆる次の時代が、必ずしも我々の道徳的理想に接近して来るということでもない。それ所か大抵の観察者は、反動的な諸時代が歴史に於てはごく一般的であることを、実によく知っている。或る人々は、この「憂き世」に於ける悪の優越と新らしい諸世代の腐敗墮落を心から嘆いている。又、或る人々は、人類にとってよりよき未来が不可能であることを、卒直に主張している。それにも拘らず、若しこれらの人々が歴史的諸事件を概観するとなれば、過去のすべては、彼等が**より良い**と考える所のものと一致した展望に不可避免的に配置される。彼等の理想の発展を促進し或いはその実現を阻害した諸事件だけが、前景に現れる。若し思想家が、現在或いは将来に於けるその道徳的理想の真の実現を信するならば、彼にとって歴史のすべては、この実現を準備した諸事件を中心に分類されるのである。若し彼が自己の理想を死後の世界へ移すならば、歴史は来世の幸福と結びついた信仰の準備に過ぎない。若し彼がより良きものの現実化に対する一切の可能性を否認するならば、彼の理想は歴史によって人間の思想の中に創造された内的な最高の確信であって、且つ重要なもの及び重要ならざるものとしての過去一切は同様に、この道徳的**確信**——かつて実現されなかったし、現実的未来にも実現されはしないが、人間の発達の最高極限として人間の意識領域に於てだけ実現される確信——の準備として彼の前に展開するのである。歴史的諸事実を我々が意識する現実的或いは観念的なより良きものへこのように近づけ、且つ過去の人類の生活の中に我々の道徳的理想をこのように発展させることは、各人にとって歴史の**唯一の意義**、諸事件の歴史的な分類の**唯一の法則**、**進歩の法則**をなすものである。我々が、この進歩を実際的に連続的なものと考えるにせよ或いは絶えず動揺に曝されているものと考えるにせよ、又その現実的な実現を信するにせよ或いは只その意識を信するにせよ。

かくして、我々は歴史の過程の中に不可避免的に**進歩**を認める。若し我々が、現在勝利を得つつある原理の味方であるとすれば、我々は自己の時代を過ぎ去った全時代の**栄光**と見

るのである。若し我々の同情が、明かに衰えたものの側にあるとすれば、我々の時代は批判的、過渡的、病的なものであり、我々は、或いは現実的世界の中で或いは空想的未来の中で或いは人類の最もすぐれた代表者達の意識の中で、我々の理想の勝利の時代が、これに続いて現れることを信じているのである。世界の近き終末を信じた者は——而もこの世界は彼にとって悪に充ちたものであったが——この終末に続いて当然あらわれるべき心正しき者達の至福を信じていた。全きものの最初の状態を受容した者は、次の歩みから進歩の理論へ踏み込んだことになる。歴史に於ける急速な諸転換を信奉するものでさえ（然し今はこの問題を展開しないことにするが）、この人間的思惟の一般法則に従うことを余儀なくされたのである。この思惟の不可避的必然性によれば、**人間にとって**歴史の進歩は、常に多かれ少なかれ明瞭且つ完全に進歩のための斗争であり、又進歩的思惟、進歩的理解の現実的或いは観念的展開である、そしてそれらの諸現象だけが、この進歩に影響を与えたところの厳密な意味で歴史的なものであったと云える。

**進歩**という言葉の私の解釈が殆んど読者の御気に召さないだろうことを、私は知っている。自然の諸過程に固有な客観的公正さを歴史に付与せんと望んでおられる人は皆進歩が私にとっては研究者の個人的見解いかんにかかっているということに、憤慨されるであろう。自己の道徳的世界観を絶対的に完全だと信じている人は皆、この世界観の諸原理に最も密接な関係を有するものだけが、**彼等にとって**だけでなく**それ自体に於ても**、歴史的過程に於てより重要なのだということを得心したがっている。然し、全く、思索するほどの人々ならば以下の単純なことがらは、もう解ってもよい頃なのだ、即ち、重要なものと重要でないもの、有益なものと有害なもの、良いものと悪いもの等の区別は、**人間にとって**だけ存在し、自然及び諸事物自体には全く無縁なものであるということ、人間にとっては、人間的(人類学的)なものの見方を一切に適用する必然性が不可避的であり、諸事物全体にとっては又同じように、人間の判断と共通するものを何等有しない諸過程を跡づける必然性が不可避的であるということ、これである。**人間にとって**重要なのは、一般諸法則であって個々の諸事実ではない、何故ならば、彼は諸対象を一般化することによってのみそれらを理解するからである。然し、諸現象に関する一般的諸法則を有する科学は、人間だけに固有なものであって、人間と切り離して考えた場合には、極めて微細な——余りにも微細なのでそのままの状態では人間が捉えることの出来ない程の——同時的及び継続的な諸事実のコンビネーションが存在するに**過ぎない**。伝記或いは歴史に於ては人間（或いは人間集団）の若干の思想、感情及び事業は、**人間にとって**理想的意義、歴史的的重大性を有する最も重要なものとして、平凡な日常生活から区別されている。然し、この区別は**彼**即ち人間によってのみなされる、自然の無意識的諸過程は、甲虫の脚の蠢或いは買手から一コペイカでも余分にふんだくろうとする小売商人の志向を生み出すのと全く同様に、万有引力とか人間の一致団結とかの思想を生み出す、ガリバルジー、ワラン及び彼等のような人々は、自然にとってナポレオン三世の任意の上院議員、ドイツ小都市の任意の市民、ニェーフスキー通りの歩道をぶらついている俗物共の任意の男の如き一九世紀の人類の見本と何等異なる所がないのである。公平無比な研究家が一般的法則の重要性、天才或いは英雄等に関する自己の道徳的判定を、**人間的**理解と願望の領域から公正で無意識的な自然の領域へ移し得るであろうような根拠となる所の与件を、科学は何一つ提示していない。

**確かに**上述の概念規定に同意しない二人の非凡な思想家の進歩に関する概念について、

此の際私は思う所を述べざるを得ない。《進歩とは、——とブルードンは語っている（進歩の哲学，二四），——それは——全般的な運動の確認である，従って，いかなるものであるにせよ存在するものに適用される一切の不変的公式の否認，宇宙の機構をも例外としない一切の犯し難い機構の否認，変化し得ないと考えられる一切の主体或いは客体，経験論的なもの或いは先験的なものの否認である》。この見解は，云わば，全般的な変化過程の祭壇の上で自己の確信に止めを刺す所の全く客観的な見解である。然し，この偉大な思想家の論ずる所を読み続けて見給え，そうすれば諸君は，種々の領域に於ける進歩が彼にとっては自由，人格，正義等の思想の集群と同意語であることを，了解されるであろう，換言すれば，彼が進歩と名づけているのは，事物の**より良き**理解及び個人，社会の道徳的により**高き**理想をもたらず変化である，この理想が**彼**ブルードンの中で形成されていったのであった。絶対的によいものが，あらゆる発達した人間にとって存在したし，又存在するであろう如く，ブルードンにとっても存在していた。それは，ブルードンにとって真理，自由，正義と名づけられた，そしてこの絶対的なものは彼にとっては，一千年至福説の信奉者達にとってのキリスト再臨による千年の治世にも似た，主観的拘束性を有する進歩の目的及び本質となっている。然し，ブルードン自身外の所で——外でもないが，その大作《革命及び教会に於ける正義について》の第九の試論の中で——進歩に関する別様の考えを述べている。ここに於ける彼の見解は，多くの点で私の書簡中に述べられたことと似ている。彼は次のように語る（1868年版，ブリュッセル，III，244以下），《進歩とは，運動より以上の或るものである，事物が運動することを指摘しただけでは，我々はそれが進歩しているということを少しも証明したことはない》と。彼は，《先験的に決定されている危機の中にも，現代的機構の必然的諸条件による所与の秩序の中にも》，又《人間の意志にかかわりのない物理，社会的諸変動》の中にも，進歩を見ていない。彼それらを駁にとって，《若し我々が正義と自由を，（一）時間の流れに於けるそれらの運動と見，（二）使し，それらの前進運動に応じて変化する人間の能力に対する作用と見るならば，進歩とは正義及び自由と同じものである》。ブルードンは，他の諸条件の中でも，進歩の中には宿命論的なものは何一つ存在していないという証明を，《完全正確な進歩の理論》に要求してさえいる。更に彼は述べている，（III，270），《我々は不可避免的に進歩を信じている》と。

スペンサーは次のように語っている（《著作集》，第一，二分冊），進歩を正しく理解せんがためには，我々は我々の利害と無関係にそれらの変化を深く観察することによって，それらの本質を研究しなければならない……進歩の付随的諸事情及び有益な諸結果はさておいて，進歩とはそれ自体いかなるものであるかを自らに問うて見よう》。然る後彼は，等質より異質への移行を有機的進歩と名づけ，これがあらゆる進歩の法則であることを証明している。ここでは既に，多分，我々は全く客観的に現象を観察している。然し，スペンサーのこの問題に対する扱い方そのものを注意深く読んで見給え，そうすれば諸君は，彼が全く主観的な見地から出発していることを了解されるであろう。彼は，人口の増加，物的生産物の数量，それらの質の改善，認識された諸事実及び解明された諸法則の増加——つまり直接或いは間接に人間の幸福の向上を目指す一切のものの増加——の如きありふれた進歩の考え方を，与件と見なしている。彼がこのような考え方の中に見出しているのは，**曖昧さ**，**進歩の陰**に過ぎないのであって，進歩そのものではない。彼は，**正にこれ**

らの変化を明らかにし、且つ正にこの過程の**本質**を見出そうと欲している、そして彼によって進歩と名付けるのに好都合な有機的発達の種類推によって、その本質を分化の中に見出したと考えている。然し、有機的発達は、著者が進歩の概念を借り来った諸現象の特徴的な特性をもっているだろうか？ これは頗る疑問である。人口の増加、物的並びに知的富の増大は、その中により良いより望ましい或るもの、人間及び人類の要求によりふさわしい或るものが、見出されるという一般的特質をもっている。然し、生れたばかりの動物の仔に、それが発生し来った胚子或いは卵と較べて、より良いものが何かあるであろうか？ 或いは何故成長した動物が、生れたばかりの動物より良いのであろうか？ 若し動物の発達に於ける**進歩**について語っても差支えないとすれば、自然に於ける目的、植物の願望、太陽系の国家について語る事も同様に正しいであろう。のみならず、若し人間社会に於て等質から異質への移行がどんどん進んで、各人が特殊な言葉で語ったり、真理、正義、美に関して特殊な概念を抱いたりするようなことになるとしたら、スペンサー自身果してこの分化を進歩とよぶかどうか、大いに知りたいものだと思う。スペンサーの思想は大体から云えば正しい、何故ならば、経験は、非常に多くの場合**彼**スペンサーの道徳的理想に対する個人及び社会の接近が分化によって行われたことを、証明したからである。然し、この概念は進歩の現象全体を被いはいはしない、而も所与の道徳的理想の創造過程としての進歩と、必ずしも一致するとは限らない。その上思想が正しい場合にも、それは進歩の**原因**だけを示すのであって、進歩そのものは、依然として人間或いは人類にとって何がより良いものであり何がより悪いものであるかということに対する思想家の主観的見解の中に存しているのである。スペンサーが既にその著《第一原理》の初版の中で、**進歩**という言葉の余りにも広汎な使用の不明確さを自覚して、この語を多くの場合に**発展 (evolution)**という言葉に変え、且つ発展に次の公式——《発展とは、絶え間ない分化と統合によって、不明確で脈絡のない等質から明確で連関性ある異質へ移行することである》(《著作集》、第七分冊、233)——を与えたということを指摘して置こう。この公式がさしたる反駁を許さないのは、一つにはそれが意味する**実際的な幅**によるものであり、又一つにはこの公式の真の意義にはそぐわない極めて多様な場合をこの公式に当てはめることを可能にする不明瞭性によるものである。然し、これは**発展**の公式であって**進歩**の公式ではないのであるから、直接ここで考察している問題とは関係がない。

かくして、例に挙げた二人の思想家は、私の引用した進歩に関する諸見解と言葉の上でだけ一致しないのであって、本質的には皆と同様に、人間的思惟の本質によって制約された同一の基盤に立っているのであると、私は考える。彼等は、自己の道徳的理想を立て或いは外の人から何らかの道徳的理想をかりて、この最高の善とそれへの接近のための戦を、歴史の諸事件の中に見ている。すべての人のしていることも全く同じことなのである。

## 書簡其の三

### 人類に於る進歩の意義

以上前の書簡で述べたことから、私自身が人類の進歩的運動の目的を何の中に見出しているのかを、読者にはっきり述べる必要があるのは云うまでもない。ではそれを試みよう。然し、その前に、私の考察全体の科学性を恐らく根底そのものに於て粉碎しそうな一つの反駁を、取り除いておきたいと思う。

若し、歴史が進歩の科学としてのみ理解され進歩それ自体が我々の道徳理想の見地からする諸事件に対する主観的見解に過ぎないものとするれば、歴史の科学性は道徳的理想——唯一の科学的真理として人類の中に**不可避的に確認されなければならないもの**——を作り出す可能性によって制約されることになる、私に指摘することが出来よう。この結論を認容することによって（私はこれを認容している）、人々は私に次の如く反駁し得る（事実反駁してきた）、即ち、人間の道徳的諸理想は現在に至るまで頗る多種多様であった、そして事の本質そのものから云っても純粹に主観的な諸現象として常に多種多様でなければならぬ、又ここで我々が置かれているのは科学の領域ではなくて信仰の領域である。或る人の信仰は外の人に拘束力を持たない、同様に他の人達の道徳的諸理想は何人にも殆んど拘束力を有しない。純粹に主観的な見解にとって科学的真理の基準は存在しないのであるから、各人は自己の**特別な**道徳的理想を作り出す完全な正当性を有している。従って進歩の評価と進歩の理解そのものは科学的に作り出され得ない。従って進歩の科学的理論、歴史の科学的構成或いはそれらの諸論点についての同意さえ断然不可能である、と。私はこれらの反駁を理由あるものと認めざるを得ない。だから暫くそれらについて詳述しようと思う。

若し、人々の間に存在し且つ常に存在して来た差異に基づいて結論するとすれば、道徳的理想の統一のみならず、科学的真理の統一も、拒否せざるを得ないであろう。人類を構成している十四億の人間の中、極めて大多数のものは、ごく表面的な科学的知識さえ持っていないだけでなく、科学的理解の基礎さえ身につけなかったし、人類学的発展の初期の諸段階すら経過しなかった。多くの種族は、若干の基本的な教の概念もなく、抽象的な言葉も持っていない。呪物崇拜、魔除け及び占いの信仰、奇蹟の信仰は、未開人及びヨーロッパの文盲諸階級に広く行われているのみならず、いわゆる開化した小教者の間にも絶えず現われている。このことから、科学は**人間のために**不変の真理としては存在しないと結論すべきであろうか？ ヨーロッパの学者達が獲得した諸結果を、幻影や予言的な夢に関する物言よりもより多く是認すべき根拠が少しもない思想の現象と見なすべきであろうか？ 所で、若し我々が現在観察している世界の事態が存続するとすれば、科学的に思索する個人の教は、幻影や予言的な夢を信ずる多教者によって常に圧倒されるであろう。私は、道徳的理想の統一が、科学的真理の統一に劣らず、確かな命題と見なされ得るものであると考えている。この二つは、個人からは特殊な発達を要求し、且つ多教者にとっては現在においても過去においても存在しないという理由で、**両方とも**拒否しようと思えば出来るであろう。然し、智的に発達した小教者の科学を**唯一の必然的**真理と見なしている人々は、道徳的に発達した小教者の諸理想を、全く個人的な或るものとして拒否する根拠を殆んど有していない。

あらゆる科学的成果は、一挙に達成されるのではなくて、思想の創造と諸事実の批判によって達成される。智力が科学的真理を理解して身につけ得るようになる前に、習練によって智力を涵養しなければならぬ。それ故に大多数の人々は現在に至るまで科学的運動の圏外に取り残されている、そして科学的批判の諸成果に通じているかなり多くの人々は、奇蹟的事件の物語でも繰り返すように、これらの諸成果を無批判に繰り返している。ある事実が、一連の厳密な研究方法による検査に合格した時、それは研究者にとって科学的なものとなる。即ち、矛盾の皆無、観察との一致、現実的類推を有する仮設のみの認容、一切の不必要な実験し難い仮設の排除、——このようなものが、一連の科学的真理の群に入る権利をもつ一切の新らしい理論に要求されるものである。これらの要求は容易に充たし難い。それ故に、人知の歴史は長期にわたる誤謬の連続であって、それらの中から正確な科学が一切毎に次第に作り出されたのである。矛盾があってはならぬという要求は、知識にブレーキをかける強力な原因の一つであった。何故ならば、新らしい命題を確実な真理と見なされるものと比較しなければならぬからである。そしてこの比較は、比較の諸点そのものが批判的に確かめられた場合だけ有効であり得た。それ故に専門の科学は哲学的考量の全体から創造されなければならぬし、又最も単純な科学の真理が最も複雑な科学の裏付けとならなければならぬ。このような訳であるから、非常に秀れた識者達が、**自説が外見だけの真理と矛盾してない**ということを理由として、若干の科学的命題を今日まで拒否してきたし、現に拒否しているということは、ごく当然なことである。観察と一致しなければならぬという要求は、同じく困難な課題であった。そのためには、**観察することを習得**しなければならぬのであるが、これ又容易なことではなかった。古代の最高の識者達や新時代の著名な学者達は、極めて粗雑な観察上の誤謬の夥だしい証拠を、我我に遺した。そして今日に至るまで、或る場合になされた観察の正確さに関する論争は後を絶っていない。科学的仮説がどこで形而上学的判断に移るかの限界を指示することが容易でないと同じ位、科学の前進のためには妥当な諸仮説なしにすまずことは不可能である以上、我我はこれらの仮説を確立する困難性については敷衍すまい。そのような例は、最も普及した諸著作や最も尊敬すべき学者達に於てさえ普通のことなのである。

これらすべての困難性は、科学的理解の遅々たる歩みを説明しているが、同時にそれは又、古代に於て自然科学の基礎的諸部門を支配していた如き諸説紛々たる混沌が現在支配している諸領域にも厳密に科学的な思惟を適用することは不可能であると考えられる理由は全くないことを、批判的に思索する研究者達に確信させる。古代世界は、論理的に演繹的・数学的・幾何学的な真理の理解を造り出した。然し今日に至るもまだ図積法を探求している人々が存在している。一七世紀は、客観的な現象学的諸科学に於る真理の検証法を確立した。然し今日に至るまで、専門家達は世代交番に関して矛盾した結果を導く諸試験で互いに対立している。心理学的観察の知識は、未だに論争の対象になっている。社会学は、ごく最近にその若干の命題を確立し始めたばかりである。あらゆるこれらの領域では、意見を異にした人々が、論敵達の科学的正当さを執拗に否定しながら、未だに對抗し合っていて、これらの領域では、いかなる諸観察が確実なものであるか、いかなる諸仮説が認容されるのか、どこに矛盾が存在しどこに存在していないかについて、折合がついていないのである。それにも拘らず、これらすべての領域で、研究者は確実な科学的一般的真理を探求している。至る所で批評家の大多数は、この真理が存在していること、それを

見出すことが可能であり且つ見出さなければならないということを認めている。一体何故に、道徳的理想の領域に永遠の矛盾を認容しなければならないのか？ 何故に、本能と利那的希求によって生活している人間を、道徳的諸現象を分析しそれらの法則を発見しようとしている人間と、同列に置かなければならないのか？ 道徳的諸問題に関して思想家達の間で行われている**現在の**諸論争から、この場合科学的諸結果に決して到達し得ないなどと、何故結論しなければならないのか？ アリストテレス（疑もなく偉大な識者）の運動論によって判断すれば、力学の存在の可能性は、いかなる場合でも拒否し得るであろう。

かくして、益々拡大してゆく個人の或グループにとっては、人類の発達と共に不可避的に必然的真理となる道徳的理想を科学的方法が創造する不可能性は存在しない。それと共に、進歩の科学的理解を増し、且つ科学としての歴史を打ち立てる可能性が得られる。

ともかくも、道徳性の領域に科学的方法を適用し得ないという確かな証拠がないのであるから、最も合理的な道徳的理想の批判的創造とこの理想に基づく歴史的進歩の科学の樹立に努めることは、人類にとって最も重要な諸問題に無関心たり得ない各個人にとって、許されることであり且つ義務に近いものでさえある。正にこのような理由によって私が何に人類の進歩を見出しているのかということに対する明確な指示を、私は敢て以後の考察全体の根底に置くのである。

**身体的・智的・道徳的な面に於る個人の発達、社会的諸形態に於る真理と正義の具現**——これが、私の見る所、進歩と考えられる一切を包含する簡潔な公式である。一言申し添えておくが、私はこの公式の中に私個人に関するものは何も計算に入れていない。多少とも明瞭完全に表現されたこの公式は、数世紀この方あらゆる思想家の意識中に存在し、現代ではこの公式に反して行動し且つ全く違ったものを望んでいる人々すらが繰り返し唱える当り前の真理となりつつある。

私は、この公式に含まれている諸概念を、これらに対し誠実な態度をとる全ての人にとって全く明確で且つ種々の解釈を許さないものと考えている。たとえ私が間違っているにしても、ともかくこれらの概念規定、この公式に含まれている諸命題の証明及びその詳細な展開は、倫理学に含まれるのであって、進歩の理論に含まれない。化学的真理は、生物学に関する論文の中では証明すべきものを持たない、倫理学の諸真理は、事その歴史的過程への適用ということである場合には、展開すべきものを持たない。思うに、上記の公式は、頗る簡潔であるにも拘らず、広汎な展開を可能にする。そしてこれを展開することによって我々は個人的道徳並びに社会的道徳の完全な理論を打ち立てることができる。私はここで、この公式を以後の論述の基礎と見なして、早速上述の意味に於る進歩の実現のために必要な若干の諸条件の究明に取りかかろうと思う。

**身体的な面に於る個人の発達**は、個人が保健衛生的、物質的諸便宜のある最小限を確保した時にだけ可能である。この限界を越すと苦難・病気・絶え間ない煩勞の可能性は、何等かの発達の可能性を遙かにしのぎ、それ故に何等かの発達が可能であるのは一部例外的な人間だけであって、その他の者は皆、自己の状態を改善する一切の希望なしに、生存のための絶え間ない鬭争の中で退化する運命にある。

**智的な面に於る個人の発達**は、現前するもの全てに批判的態度をとろうとする欲求、諸現象を支配する不変の諸法則に対する確信及び正義がその結果に於て個人的利益の志向と同一であるという理解を、身につけた時初めて、確実なものとなる。

私は、誤解を避けるために、正義が個人的利益の志向に等しいという点について、注釈を施す必要があると考える。

全般的な競争が徹底的に行われている現代の社会で、正義と個人的利益を同一視するのは、ばかげたことに思われる。事実、文明の利益を現在享受している人々は、富を獲得したりそれを増大したりすることによってのみ、それらの利益を享受し得る。然し、致富の資本主義的過程は、その本質そのものからいっても、労働者の勘定をごまかす過程、取引所に於ける非良心的な投機の過程、自己の智的能力や外交的社会的勢力の市場取引の過程なのである。いかに熱烈な詭弁家と雖も、よもやこのような手段を**正当なもの**と名付けはしまい。然し彼は、個人が自己の個人的利益を正義と一致させる可能性を求める時、個人の智的発達はまだ極めて微弱である、と主張するであろう。そして彼は人生は闘争であって真の智的発達は、この闘争で常に勝つために十二分に武装するというに存している、という別の命題を提起するであろう。以前には、良心の苛責なる困惑をこれに對せしめたり、絶え間ない闘争の中で敗者となり且つそのような場合不幸にのぞんで助けてくれる者が身近にいないという危険を對せしめたり、又社会的輕蔑、社会的憎悪等等を對せしめたりした。これらの論証はすべて、現代の人生快樂論者達によって、容易に粉碎されている。即ち、良心の苛責は——習慣の問題である。そして自分が富を**合法的な手段**で獲得しており、且ついかなる裁判官も自分達の行為に刑法の条文を適用し得ないと確信するならば、良心の苛責に対して自己を鍛え上げることはいとも容易である。若し、大多数の者が、合法的な基盤に立って致富と快樂の増大のために競争するならば、この大多数は、闘争に於る巧妙な勝利者に輕蔑や憎悪を感じないばかりか、彼に倣い且つ学ぼうと努めながら彼に驚嘆し且つ畏敬するであろう。絶えざる闘争に於る敗北の可能性について云えば、先ず第一に、大規模な富は敗北の可能性を容易に生ぜしめない。第二に、人生は短かい、だからその生涯に涉つて生活の快樂を確保することだけが問題となる。

かくして、現代の社会機構の下では、個人的利益は、正義と一致しないばかりでなく全く矛盾しているということに、同意せざるを得ない。現代に於て最大量の快樂を享有するためには、個人は、この正義の概念を心の中でおし殺してしまわねばならない。あらゆる自己の批判力を、自己をとりまくすべての物とすべての人の擄取に向け、周囲の者の犠牲に於て最大の快樂を手に入れなければならぬ。又、若し個人が、一寸でも正義などという考えや心からなる愛着の情に心を動かされたりしたならば、彼自身が周囲の者達の擄取対象になってしまうのだということを、銘記していなければならぬ。雇主は労働者を抑え付けなければならぬ。さもなければ、労働者が彼から掠め取るからである。一家の主人は、疑い深く妻子を監視しなければならぬ、さもなければ、妻子に騙されることになるからである。政府は、至る処に眼を光らす警察網をもたなければならぬ、さもなければ、外の者がその権力を奪い取るからである。富を蓄積せよ、だが警戒を怠るな、何故ならば、友がお前に犠牲を捧げるのは只高い利子を当てにしていることだし、情婦がお前に与える接吻は金で購われる接吻だからである。戦は到る所で行われている。だから武器は万人に対して常に用意されていなければならぬ。

かくして、正義と個人的利益の一致に関する命題が馬鹿げている**のか**、それとも、現代社会機構が病的な機構だということになる。若し読者が、正しくないのは後者であり、現実にはすべて当然かくあるべくつくられたものだと考えられるならば、この本を閉じられ

るがよい。この本はそのような人のために書かれたのではない。然し、その時次のような問題が起ってくる。即ち、読者たる彼は周囲のすべてに批判的態度を取ろうとする欲求を果して発達させたかどうか、又、万人の万人に対する戦に基礎を置く社会は、法律や警察が全く取り締まらない社会であり、且つこの社会は腐敗しつつあって急激な変革を要するものであるという法則の不変性を彼が確信しているかどうかという問題である。若し読者が、本能的或いは意識的に相互不信、相互搾取を宿命づけられたこの社会機構に怒りを感じるならば、又若し彼が、現在の基礎の下ではこの機構に必らず付きまとう病的過程の存在を現代文化の光に照して認識したならば、周囲のすべてに批判的な態度をとろうとする欲求は、彼を他の一連の諸問題に導くはずである。この社会機構の病的症状を治療すべきか、それとも、病気の根元を見出してこれに敵対すべきであろうか？ 若しこの病気の根元が現代の共同生活の根底そのものに存するならば、経済的政治的共同生活的人間関係の急激な変革は、これら諸関係の原理そのものにも、他の方式化を要求しないであろうか？ 病理学的な社会機構を健全なものに造り変える際に基本とすべきものは、万人の万人に対する闘争、全般的競争ではなくて、できるだけ広汎な個人間の**連帯性**ではないだろうか？ 社会成員間の連帯性が存在しない社会が果して健全且つ強固であり得るだろうか？ 個人的利益が社会的利益と一致するという自覚、個人の価値は連帯性を有するすべての人間の価値を尊重することによって保たれるという自覚でないとするれば、社会的連帯性とは果して何であろうか？ 若しこの自覚が、周囲のすべてに批判的態度を取ろうとする欲求の当然到達すべき結果であるとすれば、この結果は、上述のことがら——**健全な共同生活**に於ては、正義は歸する所個人の利益に対する志向と一致するということ——と一体どこが違っているであろうか？

**道徳的な面**に於る個人の発達は、社会環境が諸個人の独自の確信の発達を認容し且つ鼓舞する場合、諸個人が夫々異なる確信を主張する可能性を有し且つ正にそのことによって他の確信の自由を尊重する義務を負う場合、及び個人の価値はその確信に存し且つ他の個人の価値の尊重は自己の価値の尊重に外ならぬということを個人が自覚した場合にだけ、存在し得る。

社会的諸形態に於る真理と正義の具現化は、先ず第一に、学者及び思想家が真理及び正義の表現と考える命題を展開する可能性を有することを前提とする。次に、大多数の者がこれらの命題を理解し且つ彼等のためになされる論証を評価し得る程度の或最低限度の一般教養を社会が持つことを前提とする。最後にそれは、社会的諸形態が真理と正義の具現化でなくなったことが判ったら、直ちに改変を認容するような社会的諸形態を前提とする。

個人の身体的発達が可能であり、その智的発達が強固であり、その道徳的発達が確実である場合にだけ、且つ又、社会機構が、十分な言論の自由、十分な最小限の中等教育、社会的諸形態に於る変革の容易な実施等の諸条件を具備している場合にだけ、社会の進歩は、**全体として**多かれ少なかれ保証されると見なし得るし、又進歩のためのあらゆる条件が実在し、且つ進歩を遮り得るものは唯外面的な異変だけであると、云い得るのである。これらの諸条件が全部みたされない中は、進歩は、極めて近い将来にすら何等の保証も与え得ない所の偶然的部分的進歩であり得、又、外見的な成功の時代の後には常に、停滞或いは反動の時代を予想し得る。社会全体にとって最も不利な諸条件の下でも、或る個人が有利な状況によって環境の水準を遙かに凌駕して発達する状態に置かれる場合もあり得る。こ

のような有利な状況は、個人の集団にも存在し得るが、矢張り一時的な現象である。然るに一方では社会全体が停滞或いは反動のなすがままに委ねられる。又、大多数の法則は、例外的諸条件下に於る小数個人の発達などは殆んど歴史的意義を持たないということ、常に苛責なき厳格さを以て即座に証明することであろう。社会に関してそれが進歩しつつあると云い得るためには、社会の大多数が、可能性ある強固確実な発達の諸条件下に置かれなければならない。

私は、最初にあげた簡単な公式が一も二もなく読者に受け入れられることを期待したようには、ここにあげた進歩の諸条件に読者が同意してくれるものとは確信していない。然し、これは多くの公式に共通の運命なのである。それらが明らかにされない中に、極めて多くの者が同意を表明する。然しそれらが明らかにされ初めるや否や、それらを受け入れた人々は、同一公式の信奉者である彼等が互に全く理解し合っていないのではないかと、思い始める。私にとって、これらの諸条件は必要欠くべからざるものと思われるのであるが、私に同意されない方々には、この公式をそのままにしておいて、これに他の諸条件を当てはめることをお任せしよう。

然し、**それら**の諸条件を当てはめた上で、私は敢て読者に次のように尋ねよう。即ち、一体现在我々は、**人類**の進歩について語る権利を持っているのか？ 現代の人類を構成する一四億の大多数にとって、進歩の**基本的**諸条件が既に実現されていると言い得るだろうか？ せめてこれら諸条件の**いくつかでも**実現されているだろうか？ そしてこれら一四億中のどれだけの部分に実現されているだろうか？ 歴史家が文明の代表者達と見なし得る一握りの小数個人にとっての進歩の実現が、亡び去った数世代にわたる不幸な無数の人間にとって**どれ程**高価なものについたかを、或る種の恐怖を感ずることなしに考えることができるだろうか？

若し進歩の基本的諸条件は実現されているかという間に読者がどう答えるだろうかなどと一寸でも疑問を持つとしたら、それは読者にとって侮辱であると私は考える。ここで可能な答は唯一つしかない。即ち、進歩の**あらゆる**諸条件は、**唯一人**の人間にとっても実現されていないし、それらの中の**一つでさえも多数者**にとっても実現されていない、と。個人の小集団或いは個々人だけが、ここかしこでたまたま有利な諸状況の下で、**何等か**の進歩を勝ち取ったり、より良きものための闘争の伝統を、幸いにも同様に**或程度**の極めて有利な状況にある他の小集団に伝えたりしたことがあったに過ぎない。**何等か**の進歩を自己の中に作り上げた諸個人は、唯単に自己の身体的智的発達の権利を主張するために、常に到る所で無数の障害と戦い、且つ自己の精力と生命の大部分をこの闘争に費さなければならなかった。彼等が成功したのは、特に有利な諸条件がある場合に限られている。諸個人が例外的な状況に置かれた場合にだけ、生存のための闘争は行われず、時間と精力は快樂増大のための闘争に費やされた。次のような人達の境遇は一層例外的なものであった。即ち、自己のためになされた外の人達の斗争を利用して、人間的諸原則とそれらの社会的諸形態への具現を自己の中で意識的に発達させる精神的快樂を勝ち得たような人々である。然し、これらいずれの場合にも、莫大な精力と生活力がこの斗争に費やされてしまうから、斗争の目的の実現そのものための余力は殆んど残らなかった。それ故、譬え人類が、最良の状況に置かれた一小部分の者でさえ、まだごく僅かなものしか達成していないとしても、不思議はない。このように不利な諸条件下にあり乍ら、人類の或る一小部分が

正しい進歩の実現とまではゆかないがその準備と当然名付けるべき根拠を有する或るものだけでも達成したということは、一層驚くべきである。だが、この**成功した者**の割合は何と少ないことであろう！ しかもこれが**其の他の者**のどれほどの犠牲を伴ったことか？

人類が最も進歩したのは、身体的発達の面である。然し、この点でも、保健衛生的、物質的諸便宜の**必要欠くべからざる**最小限を実現し得た人間の数は、まだ何と少ないことであろう！

十四億の人類中、十分に健康によい食物を摂り、衛生学の基本的諸要求にかなった衣服と住居を有し、病気の際に医者にかかることができ、飢饉や不慮の災害の時に社会的配慮に頼り得る者は、何と僅かなことであろう！ 殆んど全生涯を、日々の糧についての心労とか惨めな生存のための絶え間ない斗争とかの中を送り、それでもまだ必ずしも自ら守り通し得るとは限らない人々が、何と夥だしくいることであろう！ この闘争のために、他の種の動物と殆ど異なる所のない状態から脱け出すことが今日に至るまで出来なかった諸種族を救えて見るがよい。合理的文化の助力を全く有しない極めて多くの種族に於る飢饉疫病の犠牲者の数を救えて見るがよい。文明開化のヨーロッパで、明日のパンの一片のために生涯苦しむ運命にある多数の住民を救えて見給え。ヨーロッパの最も**発達した**国々に於る、労働者の生活の保健衛生的諸条件に関する恐るべき諸報告を想起し給え。死亡率一覧表をのぞいて、どの数字が救パーセントの穀物の騰貴に対応しているか、寿命が貧乏人と金持にとってどのように違っているか、目を通して見給え。ヨーロッパ住民の極めて大多数の労働賃金が、いかに少ないかを想起し給え。これらの数字が、おぞけをふるような現実感をともなって諸君の前に現われる時、諸君は次のように自らに訊ねるかも知れない。即ち、工場・大学医学部・貧民救済委員会等に現代文化が創造している生活的諸便宜及び人間の身体的発達に必要な諸条件を、**現実的に享受している**人間は人類の中にどれだけいるのか？ と。現在、大多数の人間の生活と発達にとって、人間の科学及び人間の博愛はどれ程の**実践的な意義**をもっているだろうか、と。然し同時に、ヨーロッパに於る生活上の物質的諸便宜の増大が眼立っているということ、健康によい食物と住居病気の際の医療手当、突発的事故の際の警察の保護等の諸便宜を享受し得る人間の数が、最近数世紀間に増大してきたということは、認めないわけにゆかぬ。現代に於る**一切の**人間文化は、極めて苦しい窮乏におちいらぬように保証されたこの人類の一小部分に担はれているのである。

人類は、智的発展の諸条件実現の過程で、まだまだ遙か低い段階にある。絶え間ない危険に対し**自己の存在**を主張しなければならぬ極めて多くの者にとっては、物に対する批判的見解の創造とか、自然の諸法則の不変性及び正義の功利的知識の理解とかは論外である。然し、これらの苦しい煩勞から多少とも守られている少数者の中にも、批判的思索に習熟し、諸現象の法則という言葉の意義を会得し、且つ自己の利益を明瞭に理解している者は、ほんの僅かしかない。多くの人々が、文明的な少数者に於る流行・習慣・伝統・あらゆる種類の権威等の支配の引例は、余りにも多く引合いに出されて憤慨されたり嘲笑されたりしているので、今更私がこの問題についてこれ以上意見をのべる必要もないし、又、**一般に**批判的に思索する習慣を身につけた人間がごくごくまれであるという何度もくり返された真実を、もう一度くり返す必要はないであろう。或る一つの多少とも広い現象界に於る諸現象の一般化に習熟した人は、極めて少ないとはいいながら、いくらか多くいる。然

し、この現象界以外のことになると、彼等も大多数の其の他の人全部と同様、他の意見の無意味な反復に甘んじている。諸現象を支配する諸法則の不変性に関する概念の会得について云えば、真剣に科学を研究した人々の小さなグループの中に、それを求め得るに過ぎない。然し、彼等の間でも、自然の諸法則の不変性を口で説いている者すべてを、その根本原理を実際に体得した人々と見なすことは決してできない。最近の魔術師——催眠術師降霊術者・心靈術者達——の伝染病は、それに熱中した人々の長い一覧表を提供している。そして残念なことには、それらの中に科学者達の名が見出されるのである。しかもこれらの伝染病以外にも、特に生命の危険とか精神的激動等々に当って、科学者達は一再ならず魔除けや呪文に頼った（勿論、一般に行われているキリスト教の様式で）、そして、諸現象の運行の不変性と、自然の諸過程をその不可避的実現から逸らせ得ないことに対する彼等の確信が、いかに強固なものでなかったかをこれによって示したのである。このような次第であるから、キリスト教的魔除けや呪文がアフリカの荒野で我々の同時代人達の間で或いは数千年前に我々の祖先達の間で他の呪術的なものが演じたと同じ位、一九世紀ヨーロッパの輝やかな文明の中で効果的な役割を演じているとしても、何も不思議なことはない。自然科学が奇蹟の世界から奪取したものはごく少ない、だから現代文化は、生活の些事に於て合理的な態度と非合理的な態度の雑多な混合物の観を呈している。そして奇蹟に対する信仰は、**教養階級**の大多数の中でよいきっかけさえあればいつでもよみがえろうとしている。

正義の功利的な面の理解の発達に関しては、問題を提起することでさえ私は気がひける。現代の社会機構の下では全般的競争の諸条件は、正しい行為の功利的意義を露骨に否定している。従って、この支配的思潮に矛盾する概念の強化を期待することは不可能である。唯々驚嘆すべきは、人間の健全な本能が、増大してゆく支配的な競争に敵意を示して、依然として虚構の正義に跪拜することを人間に強いているということである。然し、これは全くその通りなのだ。周囲のすべての最も非良心的な搾取者と雖も、殆ど皆が皆、他人の前だけでなく、極めて屢々自分自身にまでも、自分を正しい者に見せかけたがっている。このことは、先に提起した命題の否定を基礎とする機構に於てさえ、この命題の真理であることが余儀なく承認されている徴候なのである。然し、現在この命題を理論と実践の面で理解した人間の数が実に微々たるものであることは、云うまでもない。直接的生存競争をしないでもすむ小教者の中に於てさえ、智的進歩の諸条件がいかに到達しがたいものであるにせよ、然しそれでもなお、部分的ではあるが、これらの諸条件は実現されつつある。智識の一部の領域に於てではあるが、批判的に思索する習慣を身につけた人々の小さなグループが存在している。諸現象の法則の不変性は、個人的な信念の域にまで達していることは極く少いが、学者の多数によって理論的には承認されている。唯正義の功利的意義だけは、理論に於てさえ殆ど認識されていない。

然し、個人の道徳的発達の諸条件について何を語るべきであろうか？ 信念について語り得るのは、批判的に思索する能力を身につけた人々のグループに於てだけであるから、道徳的発達の諸条件もこの小さなグループのために存在する。然し、法律が個人的信念を擁護して罰しない国々に於てさえ、この種のグループの一部分しか見出され得ない。しかも、僅かにこの部分中の小部分だけが、次のような社会環境に住んでいる。即ち、信念の独自性を道徳的悪徳と見ず、慣例墨守の教育によって幼少時代から独自の信念を根絶しよ

うとせず、且つ社会の安寧に害ある不作法なものとして生活上のあらゆる手段で独自の信念を圧迫しないような社会環境がこれである。道徳的発達諸条件の面で他の人達より恵まれた状態に置かれたこの辛うじて認め得るグループの諸個人が、自己の中に信念を生み出した場合に、彼等の小部分が、他人の信念に対して寛容の精神を保持するに過ぎず、そして更に小教の者だけが、人間の価値はその信念に存しているという意識をそれにつけ加える。それ故に、道徳的進歩が、各世代に於て人類の如何に極僅かの部分にしか可能でないかが、お判りになるだろう。しかも世代は、各、道徳的進歩の面で同じような努力をくり返している。何故ならば、信念の力と独自性並びにこれを擁護せんとする決意は、一個人から他の個人へ伝達されるものではなくて、各個人によって独自に身につけられるものだからである。進歩は、ここでは唯、強固にして独自の信念を理解した個人の教に存している。この信念がおよそ**可能である**所の人間の教は極めて少ないから、この進歩が存在しているか否かを決定する手段は一つもない。唯次のように仮定することは出来よう。即ち、進歩は、法律が思想の自由を保護する地域の拡大の結果生ずる。然しその代り、この点で弾圧的法律が存在している所では、行政的監視のよりすぐれた諸手段が以前以上に思想の自由を圧迫する。それ故に、この問題の解決は未来にかかっている。人類の中でこの問題に関係のある部分は、取るに足らぬ程しかないから、この解決は現在にとつては特別な重要性を有してもいない。私は、バックルが人類に於る道徳的進歩を否定するに当つて全く別なことを考慮していたことを、指摘しておこう。

次に社会的諸形態に於る真理と正義の具現に必要な諸条件に移ることにしよう。第一の条件——自己の科学的知識及び哲学的信念を述べる可能性——は、ヨーロッパとアメリカのかなり顕著な部分で、多少とも実現されている。そしてこれは、人間の歴史の最も現実的な進歩である、尤もここでも、余りにもハッキリした考えを抱いていた人々は、多くの困難に遭遇しないわけにゆかない。即ち、ドイツに於るルートヴィヒ・フォイエルバッハ、フランスに於るかつてのロシュフォール、マロト、アンペールの運命、イギリスに於てさえブラッドローが議会登院のさいに遭遇した困難等は、進歩のために戦いとらねばならぬ多くのものが、この途上にもまだ残っていることを示すものであった。然し、第二の条件——社会的教養の十分な最小限は、我々が既に考察したように、極めて苦しい生存競争をしないですみ且つ批判的に思索することに習熟したごく僅かな少数者にしか実現されていない。其の他全部の社会成員は、毎日の煩勞に押し潰されたか、それとも権威に追従することに慣れてしまったのである。第三の条件——存在意義を失った社会的諸形態の批判と変革の可能性——は、恐らく、憲法によって制憲及び立法議会在認められている所では実現されている。然し、現在ではこれらの合法的諸機関に対する世論の希望は非常に弱まった。これらの機関は、**社会的意見**、即ち国の成年人口大多数の意見を、正しく代表しているであろうか、又代表し得るであろうか？ 身体的発達諸条件が、大多数の人間には極めて不十分にしかみたまわれないし、智的発達と道徳的発達諸条件に至つては、殆ど万人にみたまわれないということを、我々は既に考察した。このような場合に、いかなるものであるにせよ制憲会議或いは立法議会在、現実の世論をその討論や決議に表現するなどということ、認め得るであろうか？ 日々の糧についての苦しい煩勞が、極めて大多数の人々に彼等のおかれた複雑な社会機構の下で立法に参加することを全く不可能にしており、この大多数の中で偶然に智的発達の可能性を持った小教の個人にさえ、多くの場

合現代の社会機構はありとあらゆる障害を用意している以上、現在の社会的諸形態も、暮しの保証された小教者の代表者達だけによって左右され変更される訳である。そしてこの小教者は、批判的な面で殆ど発達しておらず、正義の功利的意義の理解に至っては皆無と云ってよい程であるから、正しい判断なぞこの場合偶然的現象であり、種々の事情で立法機関の原動機のそばに位置を占めているこの小教者の排他的利己的な利害に基づく判断と決定が原則となる訳である。この小教者の知識に応じ、又彼等自身の利害の理解の程度に応じて、立法の際に彼等はこれらの利害をより完全に又はより不完全に具体化する。然し、最も良い場合でも、立法はこのようにして、革命の勃発を未然に防ぐために一般大衆の最小限の要求を満足させる試みである。然し、大部分の支配階級或いは政府側の小教者は、大概、資本の所有者には大衆を自己の致富のための単なる経済的搾取対象として見なすように促がし、政府側に立つ者には臣民を単なる警察的監視と懲罰手段と見なすように促がす社会斗争そのものを立法の中で具体化する。

社会的諸形態の改良を阻んでいるのは、小教者の**利益**だけではない。更にこれに拍車をかけているのは、習性となった**習慣**、時の力による神聖化された**慣例**である。最も発達した社会に於ても、多くの人に批判と合法的変革が許されると思われるのは、常に若干の政治的諸形態と取るに足らぬ経済的諸形態だけであった。其の他すべては、この神聖不可侵なもののために多少とも苦痛を忍んでいる多くの人々にとってさえ依然として**神聖不可侵なもの**と考えられている。ましてやそのために苦痛を感じない者にとっては尚更である。自由な共和国の一人の雄弁な政治家でも、奴隷廃止を仄めかすことも出来得なかつたような時代があった。異教徒に対する寛容が、薪の山に上らせかねない問題をひき起した時代があった。然し、現在でもなほ、ヨーロッパ及びアメリカの議会では税率や借款ならおだやかに審議できるが、富の分配に関する問題の過激な審議は不可能である。大臣の責任に関する討議は許容されているが、王朝の交替とか君主制の共和制への切替が起り得るのは、革命によってだけである。家族関係の経済的な側面は改良されるが、この関係の本質には触れられない。これらの神聖なものに触れることが直接法律によって禁止されるとか、或いは違反者がある刑罰を受けるなどは、多くの場合云えないだろう。若し立法者の中に批判的に思索する大胆な個人がいれば、意見は述べられる。然し、習慣と慣例は、たとえ心の中だけでも立法者の大多数と社会の大部分にその動因の審議に当ることを許さない。この意見は、前代未聞のものとして斥けられるであろう。その理由は、相手方に、その論証が弱いとか、彼等の利害がそのために冒されるとか思われるからではなくて、この意見が彼等の見る所**審議に値しないもの**だからである。立法者を任命する富裕小教者の間に批判的発達が不足しており、且つ、この小教者の利益が神聖不可侵なものによって殆ど損失を蒙らない場合には、この神聖不可侵なものは、思想の領域でそれらがとっくにその不可侵性を失った後でも、又、極めて大多数の人が不可侵なる諸形態の変革の必要性をなほ自覚はしないまでもその圧迫を感じるに至った後でも、事実上神聖なものとして長い間残存する。不満が昂じてくる。苦しみは増大する。容易に鎮圧される局部叛乱が起る。政府と支配階級は、余りにも明らかな困窮を緩和するための、間に合せの弥縫策と、警察的監視と懲罰手段の軽減とに望みをかける。批判的に思索する小教者が改革の諸要求をくり返す時、彼等は打ちから難い教々の**障害**に出合う。これらの諸形態は役に立たないという意見が（勿論、信念にまで達した）極めて多くの人々にゆきわたり、且つ、不満

を有する人達が、社会にとって平和的改革の途が不可能だということを自覚するまで、すべては元のままである。このような意見や自覚が生じた時、存在意義を失った諸形態は崩壊する。だが、それはもはや平和な立法的改革の手段によってではなく、暴力革命の手段によってである。この暴力革命の手段は、事実上歴史の過程に於ては、多くの場合立法上の平和的手段による急進的な改革よりもずっと多い普通的手段である。勿論、政府は革命を未然に防ごうと常に努力する。これらの革命は、諸改革を要求する在野諸党派にとっても、殆ど常に全く望ましからぬものである。然し、支配的指導的立場にある諸個人及び諸集団に於る智的、道徳的発達の欠除が、通常このような場合不可避的な流血の衝突を引き起す。革命の惨禍は万人の知る所である。実に日々の煩勞に押しひしがれた一般大衆にとって、革命が招くはかり知れぬ苦難は、彼等を常に極めて悲しむべき歴史的進歩の材料に化してしまふものである。然し、歴史的進歩は重大な社会的諸困難が存在する時に他の方法では多くの場合不可能であり、且つ、従来機構を温存する際の一般大衆の慢性的苦難は革命の際のあらゆるあり得べき苦難を時に遙かに凌駕することがあるということが直接の計算によって証明される以上、いかに穩健な改革論者達でも誠実な者であるならば、革命家たらざるを得ない。革命の際に避け得ない災厄は、革命が当然もたらす筈の**现实的**諸変革を合理的に審議することによってのみ減じ得る。しかるに我々が歴史の中で余りにも屢々お目にかかるのは、それが単に或る支配グループの他のグループとの交替に止まり、一般大衆——その境遇改善に誠実な革命家達が努力し、且つその力で革命が成就される一般大衆——は、その変動から殆ど何ものをも得る所がないという事実である。

人間の進歩の諸条件がいかに僅かしかみたまわれないかに気付く時、我々は、勿論、とこしえに人間の災厄に対する傷ましい訴えをくり返し、いわゆる歴史上の諸文明のはかなさをかこってきた作家たちの悲しげなコーラスの存在に驚嘆することを止めなければならぬ。現在極めて多数の人類が、智能と道徳的感情を鈍らせる絶え間ない肉体労働、飢饉或いは疫病による死亡の蓋然性を免れ得ないように、運命づけられたまま、多数者は常に過去に於ても同じような状態にあったのである。屢々飢に苦しみ常に明日の日を思いわずらう所の永遠に労働する機械ともいふべき人間にとって、現代は他の時期よりも決して良くなつてはいない。彼等にとって進歩は存存しない。宮殿議會寺院アカデミー・スタジオ等を擁して彼等の頭上にそそり立つ文化は、彼等に無縁のものである。昔は彼等は古来の慣習の不可侵性と共通の宗教の神聖視によって支配的小教者と結びつけられていた。時代が下ると、彼等は、家父長的首長、遠方のツァーリの彼等に対する配慮を信じた、更に時代が下ると、彼等は、《人民の大臣達》・議會、政治的集会等に於る《急進的な》雄弁家達に期待をかけて、彼等が熱心に《人民》について語るのを聞いたのである。然し、歴史はこれらの幻影を次から次へと持ち去っていった。そして輝かしい諸文明は、絶えず苦難にあえぐ多数者の前で小教者の快樂の手段として存続してきた。それにも拘らず、文明を強固にするために諸利害と諸信念の連帯性を確立し、支配的諸階級と大多教者を結ぶ紐帯を確立する必要性に関する問題が、社会全体の面前に次から次へと新らしく起ってくる。若しこの紐帯が無産大衆と開化された小教者の間に存在しないとすれば、その文明は常に強固なものではあり得ない。他国の征服者との衝突、新宗教の伝道、飢饉大衆の一時的叛乱等が、極めて輝かしい文化を、物質的、智的、道徳的諸条件におけるその外見的な素晴らしさにも拘らず、ごく短期間に破壊することがあり得る。文明がより強固であり得る唯

一の手段は、文明自身の存在に無産大衆の物質的、智的、道徳的諸利害を絶えず結びつけることである。即ち、生活上の物質的諸便宜の利益、発展してゆく科学の力、個人的価値の自覚、より正しい社会諸形態の魅惑的な影響等を、益々多くの個人に押し拡げてゆくことである。富、智的発達及び道徳的発達の蓄積資本を平等に分配することによってのみ、文明的小教者は、自己自身の発達に不動の確實性を付与し得る。

古代の東方の諸王国は、メキシコ・ペルーの諸王国及び恐らくバレンチの森林中に宮殿や寺院を遺した無名社会の王国と同様に、最初の社会的動乱によって彼等の文明もろ共葬り去られた。これは一連の偶然事ではなくて、これら文明諸形態の全く自然的結果なのであった。智的発達を神権政治が独占していた時代、生活的福祉と文化的改善を財産相続人や王宮のしきいを越えた人々の小グループが独占していた時代、一人のための宮殿、小教者のための寺院が、夥たしい多教者の絶望的な労働の結果であった時代、この大多数が、その固有の社会的諸形態の温存による著るしい生活の改善も見知らぬ征服者に服従することによる著しい被害も予見し得なかった時代、そのような時代に……この大多数に縁もなければ役にも立たぬ物珍らしい見世物にしか過ぎなかった文明と彼等を、真に結び付け得るものがあつたであらうか？ 当時は見知らぬ征服者がやって来て、社会の上層から一握りの開化された小教者を容易に**取り除くことが出来た**。エネヴェでは壮麗な宮殿や寺院が荒廃し崩壊して森林に掩われてしまいその代りにバビロンに宮殿や寺院がそそり立った。次いでバビロンが崩壊し、労働と資本がスサとペルセポリスに吸引された。大多数の者は単に華麗な光景を失っただけで、ネブカドネザルのためにしたと同じように、センナヘリブのために無益な労働に服することとなった。大多数の者は、思想的な欲求と思想的な生活の面では、ダリウスの場合と同じ位アマシス王と殆ど結びつく所がなかった。又彼等は、クロイソスの場合と同様、キルスの行った諸戦争でわけのわからぬままに破滅した……。身体的、智的、道徳的諸条件の割振りが著るしく偏っていたために、これらの文明はことごとく極端に脆弱化したのである。

ギリシャローマ的世界の没落に當って、同様の現象がくり返された。然し、ここでは、ともかくも文明は以前より広い範囲に普及し、その諸形態は幾分より正義にかなっていた、それ故に古典文明はより強固でもあり、内外両面にわたる破壊力の圧迫にそれほど容易には屈しなかった。人類の歴史に於るその影響がより深くより大きいのはこの故である。極めて多くの市民の経済的利害が、この文明と結びつき、且つ、この上なく苦しい心配事から離れて思想と政治生活の中心都市の一つにやってくることの出来たすべての人の智的利害が、この文明と結びついた。一個人の屈辱的な専制が、理想化された国家と法律の専制に変わった。智的発達の独占は神権政治と共に姿を消した。正確な科学、独自の哲学的思惟、市民の意識的な政治全体への関与は、——身体的、智的、道徳的発達の諸条件の実現を拡大した。それにも拘らず、自由な市民層の下には、比較にならぬ程夥たしい数の奴隷階級が存在し、その手に一切の手工業労働が任せられ、彼らは市民の政治生活に何のかかわりも持っていなかった。又、独裁的な諸都市の城壁外には、専横と搾取の横行している地方、諸中心地の科学的哲学的発達に無縁な地方が拡がっていた。科学的、哲学的思想の教育的な影響は弱かった。そして哲学者達は、知識層を拡大する代りに、アカデミーの扉に識らざる者入るべからずと誌したのである。ギリシャ思想は高く且つ急速に高揚した、然し、社会にとって理解し難い学者達、日常的生活の利害に無縁な哲学者達は、それ

だけに孤立してこの高所に立っていた訳である。不可避的な宿命は敢て永らく待とうとはしなかった。手工業者奴隷達と諸属領の利害を自己の利害に結びつけなかった多数の市民達は、自己の都市の自由を外来的圧迫から守ろうとしなかった。公民生活の伝統を保持してきた都市住民は、長期にわたる斗争の中で、この伝統に無縁な多数の外来者と混淆し、古代の政治生活の中心はその現実的な意義を喪失した。自己の思想を極めて多くの人々の思想と教育的に結びつけなかった小教の学者と先駆的な哲学者達は、一般大衆の呪物崇拜及び富裕小教者の知識面に於る不条理と怠惰から、自己の批判の権利と方法を守らなかった。ディアドヨイ戦争の時の動揺とローマの侵略の影響下に、批判的に思索する小教者は、批判に無縁な多数の中に没し去った。物質的保障の要求が市民生活の要求を押し潰したと同じ様に、不合理な信仰の要求が、合理的な信仰の要求を押し潰した。公正な生活というギリシャ的な理想は、法律の形態なるローマの理想に変わった。搾取者たる一群の諸都市は、先ず、世界を搾取する一都市の執政官のグループに縮小し、次いで、世界を支配する一個人の側近達のグループに縮小した。古代ローマの外敵達がローマを掠略しにやって来た時、ローマは彼等の手で打ち壊された、何故ならば、重圧を伴った皇帝の国庫は誰にも惜しいものではなかったからである。新らしいキリスト教的奇蹟の創造者達が、思いも及ばないような事を考える要求を、アリストテレス、アルキメデス、エピクロスの後裔達に真向からつきつけた時、批評は沈黙し、科学は葬られ、哲学は屈服した、何故ならば、それらの代表者達は孤立していたか、さもなければ智的関心に無縁な一般大衆の影響に自ら屈従したかしたからである。古代文明の不十分な公正さが、それ以前の生活及び思想形態と較べれば著るしい成果をあげ得たにも拘らず、その強固さを失なわせたのである。

ヨーロッパの新らしい文明も、それが自己の強固さを当てにできる程度は、一に次のことにかかっている、即ち、その文明を代表する小教者の物質的、智的、道徳的利害が、経済的にはどれ程多数者の福祉と結びつき、教育的にはどれ位彼等の思惟と結びつき、生活の上では彼等の価値が現存文明と一致しているという彼等の信念とどれ位結びついているかによる。現在の社会機構の下ではこれらの諸条件がみたされていないと考え、且つここで支配しているのは一致ではなくて社会的な反目であると考え、この病的な状態を健全な状態に——種々の社会的集団の間に連帯性が確立され得るようなより正しい機構に——移し得る諸手段を不可避的に探求しなければならない。分配の面で最も公正なる文明は最も恒久性のある文明である。

然し、文明の長期にわたる存在は、時には、発展すべき能力を犠牲にして購なわれる。若し、地理的諸条件が何とか文明を外から保証しているとすれば、その領城内で批判的な思想を抱いた諸個人——彼等は現れる度毎に押し潰すことが出来ない程決して大勢いる訳ではないが——の発達を阻止することによって、その文明を内的危険から守ることが可能である。かくして習慣や旧習を他のものより堅固に維持する或る人種には、恐らく頭脳構造が批判的発達に余り向いてないせいもあるが、蜂が蜂房を造り白蟻が蟻塚を築くが如くに千遍一律にくり返される所の一定の思考方法の習慣が代を重ねるに従って終に形成されるに至る。このような場合、社会には、宮廷騒動、流血の戦、王朝の交替が、大部の文学作品の創造すらが行われ得るが、然しその文明は変化することなく、ここに**歴史的**生活は停止する。中国は、このような停滞のかなりありふれた実例である。然し、最も高度な人種と雖も、このような停滞におちいる危険を完全に免れていると考えてはならない。

ビザンチウムは、この停滞の道程をずい分遠くまで歩んでしまった。モスクワ帝国も既にその方向を取っていた。然し、より発達した国家体制の形態でも、機能硬化の状態に達することがあり得る。

かくして、二つの危険が絶えずあらゆる文明を脅かす。文明が、余りにも小教で余りにも排他的な地位に置かれた小教者だけのものである場合には、消滅の危険がこの文明を脅かす。又、文明が、それに生氣を与える所の批判的に思索する諸個人を、開化された小教者の間に発達させない時は、停滞がその文明を脅かす。

進歩の最も基本的な諸条件が十分に満たされなければ、進歩は、何時いかなる所でも何らかの文明の強固な属性とは決してなり得なかつたし、その文明を停止と動揺、反動と革命から守ることは出来なかつた。その停滞は、あらゆる文明を脅かしてきたし、現在も脅かしている。歴史にその実例が稀であるとすれば、それは唯、停滞への傾向が社会機構の脆弱さの諸原因を取り除きくことさえ出来かつたからに過ぎない、つまり外敵と内部の病弊が社会に蟻塚に変ずる余裕を与えなかつたのである。かくて、人類に於る強固な進歩の**確実性**は、決して存在しなかつた、然し、不利な諸条件にも拘らず、起りそうもない事が起り、進歩の科学たる歴史が、ここかしこで殆ど目につかぬ人類の小教者のためにあれこれの資料をたくわえるようになってきた。ここかしこで、諸個人とその諸集団が、身体的、智的、道徳的に発達することができ、あれこれの真理を獲得し、幾分なりとより多い正義を小集団の生活に具現化し、且つ、進歩のための有効な斗争の諸手段を他の世代に遺すことが出来たのである。**社会的**進歩の諸条件（即ち、所与の社会に於る障害のない強固な進歩に必要欠くべからざる諸条件）はどこにも実現されなかつたとしても、個々人の進歩的活動のための諸条件は屢々実在した、即ち、同時代の文化に対する批判的態度、牢固たる信念、危険をも顧みずそれを具現化しようとする決意がこれである。一般に、これらの諸条件は、若し**社会的**進歩のための諸条件が全く実現されなかつたことを考慮に入れるならば、表面的に想像されるよりも屢々満たされたことになる。個人の智的発達、それが強固なものではなかつたにしても、現状批判にまで及ぶことを必ずしも個人に妨げなかつたし、時には、発達した人間の個人的利益と正義の一致を自覚することさえ妨げなかつた。道徳的発達、現存の社会機構の下ではいかに**見込み薄**であるにせよ、最もおくれた社会環境の中にさえ矢張りあらわれたのであった。極めて困難な諸条件の下であっても、思想家達は、真理と正義に関する自己の理論を吐露し、自己の周囲に共感と理解を見出した。進歩に対して頑強に抵抗した社会生活の諸形態は、思想の発達の高圧には屈しなかつたとしても、一再ならず革命の勃発の下に崩壊した。最も敵対的な諸条件の下に於てさえも、進歩は**可能**であった。実際にそのようなことが起っている。文明がその脆弱さのために崩壊すると同時に、ある地方で獲得された諸成果は消え失せたが、その時、それらの伝統は大部分他の地方に生き延び、芽を出して、歴史のために新しい地盤を僅かながら再び斗い取った。然し、人類は、一切の犠牲と一切の歴史的斗争を賭けても、**強固な**進歩的発達のための十分な諸条件を決して斗い取ることは出来なかつた。それにも拘わらず、これは進歩の**諸条件に過ぎず**、他方進歩の**目的**は遙かに遙かに広範な諸要求を含んでいるということを、銘記しなければならない。若し我々が、上述の強固な社会的進歩の基本的諸条件の各々を、この条件に対応する究極の目的と対比してみるならば、最もよくこのことを了解し得るであろう。

保健衛生的、物質的諸便宜の最小限、これが——必要欠くべからざる進歩の**条件**である、生活上の諸便宜が誰でも手に入れ得る状況の下に於る保証された労働、これが——その条件に対応する究極の**目的**である。批判的にものを見ようとする欲求、自然の諸法則の不変性に対する確信、個人的利益と正義の一致の理解、これが——智的発達の**諸条件**である。組織的の科学と正しい社会機構、これが——その究極の**目的**である。自主的な信念にとって好ましい社会環境及び信念の道徳的意義の理解、これが——道徳的進歩の**条件**である。明白強固で合理的な信念の発達及びその**实际的具現化**、これが——その**目的**である。言論と思想の自由、一般教養の**最小限**、進歩に**道を開いている**社会的諸形態、これが——進歩的**社会の諸条件**である。各個人に可能な発達の**最大限**、各人が到達し得る進歩の**結果**としての社会的諸形態、これが——社会的進歩の**目的**である。

これらの諸目的を心に留めるならば、上述の諸条件は、極めて低い社会的発達の段階を現わしている。然も、それらは何時いかなる所に於ても満たされなかった。進歩の本当の目的は、思想家の大多数には、ユートピアに外ならぬものと思われている。然し、それにも拘らず、強固な進歩の諸条件が全く存在しないにも拘らず、歴史は矢張り人類の中に存在し、進歩は実現されている。

だが、その代り、進歩は人類にとっていかに高価についたことであろう！

## 書簡其の四

### 進歩の代償

人類は、その永い歴史を通じて、歴史家達が誇らかに人類の代表者、英雄と名づけている若干の天才を生み出した。これらの英雄達が行動することが出来、且つその出現によって福祉をもたらした社会に彼等が現われ得るためには、自己の人格を高め、知識をひろめ、思想を会得し、性格を強固にし、より好ましい社会機構を確立しようと意識的に努力した小さな集団が形成されなければならなかった。この小さな集団が形成されるためには、絶えず生存のために闘う多数者の中に、極めて苦しい生活の煩勞をまぬかれている少数者が存在する必要があった。日々の糧、住居、衣服のために闘う人々の大多数の人々の中から、この**民族の精華**、これらの**比類ない文明の代表的達**が出てくるためには、それら**大多数の者が或る期間存続しなければならなかった**。然し、これは、一見して想像される程決して容易なことではなかったのである。

人間は、自己の同族たる動物達との原始的生存競争で辛酸を嘗めた。人間は、敵達の中にあつて攻撃と防禦の強力な自然の武器のお蔭で鍛え上げられてきた他の動物とはちがってその様な武器をもっていなかった。そして人間は斗争の際に最も強い動物の肉体的な武器の餌食になった。人間には、より容易に危険を逃れるための這ったり、跳ねたり、飛んだり、泳いだりする器官が欠けている、所が一方では、最も弱い動物は恐らく、他ならぬこれらの諸器官によって自己保存を全うしているのである。人間は、すべてを**習得し**、あらゆるものに自己を適合させなければならぬ。さもなければ人間は滅亡するからである。ある著述家達の意見によれば、人間の子は、平均してその生活の5分の1を一人立ち出来ずに両親の厄介になる、然るに一方、他の種の動物では、この数字は決して20分の1

をこえることはない。この隔たりが原始人の場合もっと近接した数値を表わしていたと仮定しても、それは矢張り何としても人間にとって不利であった。従って、動物界の中で人間が生存してゆくことは、概して頗る困難なことであった。

ある器官が次第に発達するにつれて、それは他の種の動物全体の優勢をくつがえし、更にこれを凌駕して、この斗争で人間に勝利をもたらすことが**出来た**。それは、**思考器官**であった。動物より**一層よく**思考する能力のある幸運な少数の人々、自己保全のための諸手段を考え出す能力のある少数の人々が育成されるに先立って、無数の二足獣が、恐らく敵である野獣共との絶望的な斗争の中に滅亡したものである。この少数の人々は、残りの人間全体の破滅を代償にして自分達を**守り抜いた**、そして二足獣の間に於るこの**最初の全く自然的な貴族階級**が、人類を**創造した**のである。伝承された能力と理解力が、これら初期の天才達の教々の発明を、理解力の最も有利な条件を有していた僅かな少数者に伝えた。かくして、人類の存在は保証されたのである。

その昔人間は、他のあらゆる動物と斗ったと同じように、人間同志の間でも食物を奪ったり滅ぼしたりするために斗ったとすれば、今度は、未来の運命をかけた真剣な斗争が人間間の斗争だけに限られることになった。勝利の可能性はこの場合、より同等である。従って、斗争は、当然一層執拗となり一層長期にわたることになる。体の敏捷さ、最初の教師たる動物に対する模倣である、完成された攻防の武器の使用、即ち個人が成就した一切の発明は、多くの者の破滅を招いた。捨てられた子供は破滅した、妊娠中の女や出産したばかりの女は破滅した、敏捷、機智、警戒、理解力等の足りない最も弱い者は破滅した。そして、身体が頑健なために外の者より早く世話がいらなくなった子供や、恵まれた境遇のおかげで外の者より長く世話をみて貰った子供は、持ちこたえた。体力、思考力が共にすぐれていた者は持ちこたえた。同じ能力を有する者の中でも最も幸運な者が持ちこたえた。彼はより良い生活をした、彼はより安らかに眠った、彼はより多く識った、彼は自己の行為を**一層よく熟慮する**時間を持った。これらの幸運児達は、自己の全同胞の撲滅を代償にして生存し得た人類第二の貴族階級を構成した。共同防衛と共同労働のための人間の強固な同盟は、人類の道徳的発達にとって、確かに最初にして最大の事業であった。人間は、長い間子供達を養育する母を中心に一団をなす最初の最も古い家族を、その動物的な状態から引き出した。人類は、発達するにつれて、猛獣或いは若干の猿の例によって、他の社会形態を知り、防禦或いは攻撃の一時的同盟を知った。原始的な母系家族の地盤の上に、最初の広汎な純粹に人間的な結合——母系氏族——が形成された。人間は困難な生存競争の中で、共通の事業に立脚し且つ個人的なエゴイズムを従属させる所のこの強固な結合の形態を作り上げた。現代の多くの学者達が行った諸研究の一般的な結論は、妻子と財産を共有する緊密に結合した人類集団が共同生活の最も古く且つ殆ど一般的な純粹に人間的な形態であることを、我々に指摘している。これは、人々の間の最初の強固な**連繫**であった、そしてこの連繫は、まだ盲目的に支配していた習慣に基づいてはいたが、この連繫を続ける中に人間は一連の行動を予定する可能性、生活プランの可能性を将来のために習得した。このことは、個人に彼がこの共同体に入ることによって生存競争でどれ程得る所が多いかを教えた第一課であった。個人は排地的エゴイズムをこの共同体に犠牲として捧げる、然しその代り、能力の巨大な増加、共同体全成員の共通の熟練と共通の思考活動の諸成果、及び長期にわたる多くの世代の伝統を、この共同体から得ることになる。この基

本的な人間の結合体から、後には、家父長制氏族、家父長制家族、種々の家族結合形態が作り出され、諸種族と諸民族が発達してきた。より弱いあらゆる集団は、これら氏族結合体との斗争の中に滅亡するか、でなければ何らかの形の結合体に合体しなければならなかった。これらの結束した力の前では、いかなる形のものであるにせよ結合体なるものに考え及ばなかったり、或いはどういう訳かこの発明を見倣わなかったものは、自己を守る何等の可能性もなく消滅し去った。氏族的結合体相互の撲滅戦は、戦う者達の持つ勢力が大きければ大きい程、人間集団がその集積に伴って経済的欲求を大きくし仮借なきものになればする程、益々苛烈なものにならざるを得なかった。それ故彼等は、これらの欲求を満足させる僅かな手段を競って奪い合った。人類は、この多教者の撲滅を代償として、文化の絶えざる進歩の**可能性**を購った、そして、それを一つの世代から他の世代へ伝えることによって、社会性と個人的愛着の習慣、知識と信仰の伝統を獲得した。

斗争は、諸氏族、諸種族、諸民族の間で続けられた。其の間に社会結合の諸形態が複雑化し、共同体的な、氏族的な、家族的な、種族的な、私的な所有の諸形態が作り出され、身分的、カスト的、国家的な諸関係と奴隸制が作り出された。生存競争しか問題にならなかった間は、敗北者達は情容赦なく殺された。然し、他人の生命が自己の**便宜**に役立つという最初の教訓は空しく消失する筈がなかった。自己の快樂を増大せんとする願望は、敗北者を殺さない方が**時には有利**ではなからうか？ということを慎重に考えさせる刺戟になった。必要な物を獲得する労働は他人にやらせて、もっぱら心身両面の機敏さを自己の中に発達させる方が、勝利者にとって有利でなからうか？というわけである。この功利的な原理に思い至った先史時代の人類の天才的諸個人は、他人の生命の尊重と自己の価値の尊重を、この原理の基礎に置いた。彼等は、正にこのことによって無意識に、身体的発達と智的発達、文化と科学を、自己と子孫達の義務とし道徳的理想としたのである。彼等は自己と子孫に進歩のための**余暇**を確保してやった。彼等は、天才的で幸運な彼等の先駆者達が動物の中に人類を創造し、人間的な個人と半ば動物的な諸集団との斗争の中で、人間社会と人間種族を創造し、未来の進歩の**可能性**を創造したように人類の中に進歩を**創造した**。然し、少数者のこの進歩は、多教者を奴隸化し、且つ文明の代表者の資質たる心身両面に於る機敏さの可能性を多教者から剝奪することによって、購われたのである。少数者が自己の頭脳と筋肉を発達させていた時、彼等の筋肉組織そのものが一時的で、閑暇と休息を伴う多種多様な軍事的活動に於て多面的に発達していった時に、多教者は、他人のための単調で退屈で絶え間ない平和的労働を運命づけられ、思想活動の余暇もなく、心身両面の機敏さの点で支配者達に及ばず、従って、自己の発達と真に人間らしい生活の権利を獲得するために自己の巨大な力を用い得ない状態に止っていた。

力と悦びとしての文化と科学の偉大な意義の自覚は、この力と悦びを独占しようとする願望を自然に生ぜしめた。露わな強制、社会組織、法律的懲罰、宗教的恐怖、揺り籠にいる時から吹き込まれる慣習的伝統等は、——家柄がよく、知識があり且つ発達した少数者を、残りの者すべてから別け隔ててしまった。この**残りの者**の疲れを知らぬ労働と生存競争を代償にして、少数の者だけがより良い女を選び、より良い子供を生み、その子供をより良く養育することが出来、食物、住居、ごく平凡な生活的諸便宜に心をわすらわさず、観察したり熟考したり比較対照するために時間を使うことが出来た。真理を得ようと努力し、正義を考量し、技術の改善やより良い社会機構を探求することが出来、又、真理

と正義に対する熱烈な愛、それらのために自己の生命と幸福を犠牲に捧げる覚悟、真理を説き広め正義を実現しようとする決意を、自己の中に発達させることが出来た。

真理と正義の伝道行きわたって、それを信じ理解していた少数の人々から、発達を快樂とする人々の小集団形成され、この集団の中で感受性に富む信奉者達が教化され、富裕な少数者の中でこれを信する者が彼等に加わった。実力や同意が真理と正義の教義を時々法律と習慣の中に持ちこんだ。発達した諸個人や、内的欲求から正義の具現と真理の弘布を希求したように、思慮ある少数者は、自己の利益のために、生活上の諸便宜の**一部**を多数者と分ち合い、知識層を或る程度まで拡大する方が良いと考えた。文明の強固さはこの拡大の必要性の自覚にかかっているということは、私の既に述べた所である。然し、このことの理解は遅々としてすすまなかった、卑しい打算は常に、生活上の諸便宜を他の人々に出来るだけ少く分ち、彼等の解し得る知識の範囲を出来るだけ制限するように仕向けた。思索することに対する嫌悪は、一切の新らしい時代的要請の中に、何かしら社会秩序に敵対的なもの、何かしら犯罪的なもの、罪障めいたものを感じさせるものである。それ故に、知識の独占者達は大部分、あらゆる手段を弄して知識の進歩に逆らった。彼等は自己の知識を、因襲的な理論や権威をもった教義の枠に押しこめ、これらの知識を神聖な伝説や超自然的啓示と混ぜ合せた、そして、正にそうすることによって、自己の知識を将来の批判に対し冒し難いものにしようと努めた。後に至って、知識が世俗的なものとなり、その独占者達をも神聖なるものの玄妙な神秘によって守ることが出来なくなった時、中国官人のおきまりの小さな球とか、博士・教授・アカデミー会員の大げさな免許証とかを持った御用学者の結社が出現した。彼等も全く同じように将来の批判を免がれようと努めた。彼等は注意深く自分達の結社を鎖し、新勢力が科学的批判の**旗幟**を余りにも大胆に掲げれば、これをその中から逐い出して抑圧した。独占者達は、以前に**神聖な**科学がそうであったような習慣と伝統を、**公認の**科学から作り出そうと努めた。**承認された**この知識は余りにも屢々批判の敵、科学的進歩の敵となった。この進歩の弱さが、人間の価値と正義の諸形態の理解を不可避免的に正しくないものにして来た。諸文明が長い間脆弱であったのはこのためである、諸文明が絶えず停滞への傾向を有していたのもこのためである、更に、数千年もの間に出現した若干の偉大な人間のため、辛うじて認め得る僅かな少数者の進歩のために、無数の人命、血潮の海、あまたの世代の量り知れぬ苦悩と絶望的労働が費やされたにも拘らず、私が前の書簡で指摘したように、人類の中に極めて些細な進歩しか認められないもの、このためなのである。

若干の思想家がその書齋で**人類の進歩**について語り得るために、人類は高価な代償を払って来た。それ所か、現代に至るまでまだ人類に殆ど利益をもたらしていないような教育者達が養成された若干の小さな学校のためにも、人類は高価な代償を払って来ている。若し、現代の教養ある少数者が、過去に生存競争でたおれた人間の教を教え、また、自己の生活の維持と他人の発達のためだけに働いた多くの世代の労働を評価するならば、又若し、現在**いくらかでも**人間らしい生活をしている人間の一人一人にどれだけの人命とどれだけの労働価値が支払われているかを算出するならば、——若し、今云ったことがすべて可能なものとすれば、恐らく我々の同時代人の中には、血潮と労働の資本がどれ程彼等の発達のために費やされたかを考えただけで、震え上ってしまう者がいることだろう。だが、このような計算が不可能であるという事情が、彼等の感じ易い良心を和らげてくれて

いるのである。

然しながら、戦慄すべきことは、少数者の進歩が高くついたということではなくて、それが**これ程**高くついたのに、その代償に**これ程**僅かしか酬いらなかったという点である。若し少数者が、もっと前から一層努力して、文化と思想の領域で獲得した発達を自己の周回におし拡げようと気遣ったならば、失なわれた生命と労働の量は、これ程多くなかったであろう。我々一人一人に当る額は、もっと少なかったであろうし、世代を重ねる毎にかくも龍大に増加しなかったであろう。我々は自然的必然性の諸法則を支配し得ない、それ故に、思慮深い人間はそれ等に順応し、それらの平静な研究に満足し、出来るだけ自己の諸目的のためにそれらを利用しなければならない。我々は歴史をも支配し得ない。過去は未来の修正のために時々役立つ諸事実を我々に与えるだけである。我々が父祖の罪業に対して責任を負う程度は、我々がその罪業の諸結果を修正しようと努力しないで、それらの罪悪を継続し利用する程度に限られている。我々が或る程度支配し得るのは、未来だけである。何故ならば、我々の思想と我々の行為は未来の真理と正義の全内容を構成する資料をなしているからである。各世代は、なし**得た**こととなさなかったことだけについて子孫に責任がある。それ故に、我々も子孫の判定を心に留めて、次の諸問題を解決しなければならない、即ち、我々が歴史的進歩という響高い名称で呼んでいる過程の中に、不可避的・自然的な悪がどれ程あるか？ 我々開化された少数者にこの進歩の利益を享受する可能性を与えた我々の祖先が、進歩の利益に決してあずからなかった多数者の苦悩と労働をどれ程無益に増大し引き延してきたか？ 未来の諸世代の見る所、この悪の責任がいかなる場合に我々にもふりかかり得るのであるか？ というような問題である。

生存競争の法則は動物界では極めて一般的であるから、我々は、原始人を非難する理由を少しも持たない。人々の間に相互の連帯性の意識や真理と正義の欲求が目覚めるまでは、この法則は人類にも適用されていた。人々が互に撲滅し合い、殺人を擄取に切り替えるに至るまでは、この意識は恐らく目覚め得なかったであろう。それ故に、諸国人、諸集団、諸氏族、諸種族、諸民族間のこの長い全斗争期間を、我々は唯動物的事実と同じものとして考察せざるを得ない。

初期に於る知識の蓄積、権利義務に関する思想の発達は、特に有利な諸状況に置かれた人々、即ち、他の人々の犠牲によって、余暇とより良い給養や教育を受けた人々の中で行なわれる過程以外のものとして考えることはまず出来まい。そして、これは他の人々が、自己の生命或いはひどい苦しみといった犠牲によってではないにしても、自己の労働の強化によって、はじめてこの余暇と給養、教育を少数者に与えたのである。習うより先に教師を持たなければならぬ。大多数者は、より発達した少数者が彼等に働きかけなければ、発達し得ない。それ故に、人類には、一切の発達が存在しないか、大多数者が最初自分達の肩に幸運な少数者を担って、彼等の分も働き、彼等のために苦しんで滅びるかしなければならなかったのである。これも亦、確かに自然の法則であろう。このことを心に留めるならば、我々に残されているのは、このような代償を払って購われる発達なら我々は全く欲しないと主張するか、それとも、このことをも人類学的事実として考察するかである。然し、前の書簡の初めで私は既に全面的発達を進歩の公式そのものに含めておいた、従って、発達一般の否定を許容したりすると矛盾におち入ることになる。そこで我々は次の事実を甘んじて認めることにしよう、即ち、人類は、その発達のためには、極めて高い犠牲

を払っても、師範学校とより発達した少数者を準備する必要があった、その理由は、科学と多面的な生活上の实地応用、思索と技術がまずこれらの中心で蓄積され、次第に益々多くの人々に拡大されて来たからであると。

進歩に於る必然的、自然的な悪は前述のことがらに限られる、これらの法則の限界を越えると、後は人間の諸世代、殊に開化された少数者の責任になる。直接的な生存競争以外に歴史で流された一切の血、人間の生存の権利が多少とも明瞭に意識されていた時代に流された一切の血は、犯罪的に流された血であり、それを流した世代が責任を取るべき血なのである。言葉の最も広い意味で**文明の普及者**たることを欲しなかったすべての開化した少数者は、若し彼等が文明の**代表者**と**保護者**の役割だけに止まらずに文明の**推進者**の役割をも引き受けたならば取り除くことが出来たはずの同時代人及び子孫達の一切の苦痛に対して責任がある。

若しこの見地から現代までの歴史の全景を評価するならば、我々は恐らく次のことがらを認めざるを得ないだろう、即ち、すべての歴史的世代が、生存競争という理由づけもないに血潮の河を流したということ、自己の文明を誇る少数者が、常に到る所で、この文明をおし拡げるために殆ど何一つしなかったということである。人類に於る知識の領域を拡めることに心を砕いた人は少く、思想の強化と正しい社会的諸形態の探求に心を砕いた人は更に少く、このような諸形態の具現化を志向した開化した少数者に至っては、ごくごく僅かしか見出されない。多くの輝やかしい文明は、このように大多数者の利害を自己の存在と結びつけ得なかったために滅亡した。例外なしにあらゆる文明に於て文化上の諸便宜を享受した人々の大部分は、文化を享受しなかったし又享受し得なかった総ての人達のことを、全く考えなかった、それ故、獲得された生活と思想上の諸便宜がどれ程の犠牲によって購われたかについては、尚更すこししか考えなかった。然も、次のような連中は常に少くなかった、即ち、文明の各段階に立ってその段階を社会的発展の極限とみなし、これに対する一切の批判的態度に憤慨し、文明の福祉をより多くの人々におし拡めたり、それにあずからない多数者の労働と苦悩を軽減したり、又より多くの真理を思想の中に、より多くの正義を社会的諸形態の中に持ち込もうとしたりする一切の企図に憤慨した連中である。これら停滞の宣伝者達は、歴史全体がより良いものを追求する仮借なき障碍物競走であるという考に戦慄した、ここでは、停止するものは皆歴史活動の舞台からすぐさま脱落し、名もない観衆の群の中に姿を没して、動物的なつまらぬものとして滅亡してしまうのである。このような競争に能力のない者は、安静を楽しむために止って休息することを外の人々にも説き勧める、恰かもこうしたが、人間が人間として止まろうと思う時にも人間に可能であるとでも考えているかの様に。これら停滞の宣伝者達は、社会的進歩に対して完全な障碍物を置くことには滅多に成功しなかったが、社会的進歩を遅らせ、大多数者の苦悩を増大することには屢々成功している。

このことからして、我々は次のことがらを確認しなければならない、それは——現代文明の利益は、**不可避的な悪**のみならず、遙かに大量の全く不必要な悪によって購われたということ、そして又、開化した少数者の先行せる諸世代が、部分的には彼等の怠慢さによって、部分的には一切の開化活動に対する直接的抵抗によって、この不必要な悪に責任があるということである。過去にあつては、我々は今早この悪を匡正し得ない。苦しみ悩んだ多数者の諸世代は、その労働を軽減されずに死んでしまった。が、現在の開化された少

教者は彼等の労働と苦悩を利用している。それだけではない、更に彼等は、極めて多くの同時代人の苦悩と労働をも利用しており、且つこれら同時代人の子孫達の労働と苦悩に影響を及ぼし得る。我々は、この後の方のことがらに対しては子孫に責任を負って来たり又将来も負うだろう、それ故に、実現された進歩にどれ程の代償が支払われたかを歴史的に研究すれば、次の如き**実際的な問題**に逢着する、——現代の世代は、自己の責任を減ずるために、どのような手段を持っているだろうか？と。若し、現に生存している発達程度のさまざまな諸個人が、——人類の新らしい数々の苦悩に対して後世に責任を負わないで済ますにはどうしたらよいか？——と自らに問い、しかも、若し彼等が皆、**自己のなすべきことをはっきり理解している**とするならば、答は勿論さまざまであろう。

人類生活の最初の時代に祖先達が行ったように、毎日肉体的生存のために斗っている多数者の一員ならば、自分に次のように云うだろう、——お前が知り、お前がなし得る限り斗え！ お前とお前が愛情の絆で結ばれている者達のために、生活の**権利を守れ！**これが汝等父祖達の準則であった、お前の状態は彼等より良くなっていない、これがお前にとって**唯一の準則**なのだ。

文明がその人権意識を自覚めさせはしたが、唯それだけに止まった同じ大多数者の中より不幸なものなら、自分に次のように云うだろう、——お前が知り、お前が出来る限り斗え、自己と他人の価値を守れ、必要とあらばそのために身を犠牲に捧げよ！と。

自己の快樂を増大し強固にすることだけを希んでいるが、その快樂を思想面に於るよりは生活上の諸便宜の面で追求する傾向のある開化された**少数者**の一員ならば、自分に次のように云うだろう、——お前は、多少とも連帯性が支配している社会に於てのみ楽しむことが出来る、それ故に、自己と他の人々の中でこの連帯性と相反するものに対して抵抗せよ、現代社会の不和反目が社会的病気であることを自覚すれば、直ちに、お前自身もこの反目に苦しむ、それ故**大多数者の境遇改善に努力して自己の苦悩を減ぜよ**。この目的でお前が今日の幸福の中から**犠牲にするものは、社会の病気**、お前にも苦悩をもたらす病気をお前がほんの僅かでも減少したという意識となって、お前に戻ってくるであろう。自己の**現実的利益**を研究せよ、自己の周囲と自己の中なる苦悩を減ぜよ、これがお前にとって最も有利なことなのだ。

自己の発達、真理の探求、正義の具体化に自己の快樂を見出している**少数者**の小さな集団ならば、自分に次のように云うだろう、——自分が享受している生活上の諸便宜の一つ一つ、自分が獲得し或いは作り出す余暇を有した思想の一つ一つは、無教の人間の血、苦悩或いは労働によって購われたのである。自分は過去を修正することは出来ない、しかも自己の発達のためにいかに高価な代償が払われたにしても、自分はそれを拒否し得ない、何故なら、この発達こそは自分を活動へ駆り立てる理想だからである。唯無力な未発達な人間だけが、彼にかかっている責任に堪えかねて、悪をのがれるためにテーパーに或いは死に赴くのである。悪は出来るだけ匡正しなければならぬ、然し、これをなし得るのは生きている間だけだ。悪は**つぐなわ**なければならない。若し、現在或いは未来に於る悪を減ずるためにこの発達そのものを利用するとすれば、私は自己の発達のために払われた血塗れの代償に対する責任を免れ得るだろう。若し私が発達した人間であるとすれば、私は**そうする義務がある**、しかもこの**義務は私にとって極めて容易である**、何故ならば、それは正に私の快樂とする所のものと一致しているからだ、換言すれば、より多くの真理を探

求しおし拵め、より正しい社会機構を明らかにしてその具現を志向することによって、私は自分の快樂を増大し、しかもそれと同時に、現在或いは未来の苦難にあえぐ大多数者のために、なし得る一切のことをしていることになるからである。かくして、私のなすべきことは、簡明な一つの方式に帰着する——それは**発達した人間の理想**としてお前自身が立てた所の理想に応じて生活せよ！ という方式である。

若し総ての個人がなすべきことを理解しているとすれば、事は極めて簡単且つ容易であろう、然し、誠に困ったことには、なすべきことを理解している者は極めて少いのである。前述の諸方式に則っているのは、第一の範疇に属する人々の一部とその他諸範疇の中の僅かな者だけである。自己の肉体的生存のために斗っている人々の他の部分は、十分な根気強さを以て自己を守ってはいない、——それは、どうして守ったらよいかを知らなかったり、或いは守ることが出来なかったりするからではなくて、決意の不足と無関心によるのである。第二の範疇に属する人々の大多数は、矢張り自己の状態から脱け出す可能性を持たず、日々の糧のために自己の価値を犠牲にし、自分自身に対してすら卑下している。第三の範疇に属する人々の大多数は、自己の現実的利益を解せず、慣例に従って行動し、且つ、各人に——従って彼等自身にも——苦悩をもたらす社会病にほんの少しの抵抗すらなし得ない、即ち、彼等は苦悩を免れようと努めながら、それらの苦悩の中で社会的反目に発する所のものを減少することが出来ない。最後の範疇に属する人々の大多数は、真理と正義の代りに偶像を据えるか、真理と正義を生活の面でなくて思想の面だけに止めるか、でなければ、文明の進歩の諸利益を享受しているのはいかに微々たる少数者であるかを見ようと欲しないのである。

かくして、この進歩の代償は益々増大して来ている・・・

## 書簡其の五

### 諸個人の行為

前の二つの書簡で私が述べたことは、帰する所同一の結果に導く。若し社会が、批判的に思索する諸個人を抑圧するならば、停滞の危険が社会を脅かす。若し文明が——それがいかなる文明であるにせよ——僅かな少数者の排他的財産になるならば、破滅がその文明を脅かす。従って、人類の進歩がいかに小さなものであるにせよ、現に存在しているものは専ら批判的に思索する諸個人の肩に懸っている、彼等なくしては進歩は絶対に不可能である、進歩をおし拵めようとする彼等の志向がなければ、それは極めて脆い。これらの人々は通常自己を発達した人間と見なす権利があると考えており、且つ、**正に彼等の発達**そのものために、私が前の書簡で述べた恐るべき代償が払われて来たのであるから、彼等は進歩に対して借りを返す道德的義務を負っていることになる。この返済というのは、結局、我々が既に考察したように、生活上の諸便宜、智的道德的発達を、力相応に多数者におし拵め、科学的理解と正義を社会的諸形態の中に持ち込むということに尽きる。

では次に、人間の進歩の唯一の手段であるこれら諸個人について述べよう。進歩がいかなるものであるにせよ、それは専ら彼等に依存している。進歩は、雑草のように地面からは生えない。進歩は、腐敗している液体内の滴虫類のように、空中に漂う胚子からは繁殖しない。進歩は、四十年程前に非常に多くの人々が論じ、現在でもまだ多くの人々が論じ

ている神秘的諸理念の結果として、突然人類の中に現われるようなことはない。その種子は事実理念ではあるが、然し人類の中に神秘的に存在しているものではない。この理念は、個人の頭脳の中に胚胎して、そこで発達し、後にはこの頭脳から他の諸個人の頭脳に伝わり、質的にはこれら諸個人の智的、道徳的価値の増加面で、量的には彼等の救の増加面で拡大し、そして、これら諸個人が自分達の思想の一致を自覚し、一致した行動を決意する時、社会的な力となる。この理念に徹したかかる諸個人が、それを社会的諸形態の中に持ち込んだ時、この理念は勝利を得る。

若し進歩に対する自己の愛について語る個人が、その実現の諸条件について批判的に考えをめぐらすことを欲しないとすれば、彼は本質的には、決して進歩を望んでいなかったし、その上心からそれを望むことも決してできなかったということになる。若し進歩の諸条件を自覚している個人が、自分では何一つ骨を折らずに、進歩がひとりでに実現されるのを手を拱いて待っているとすれば、彼は進歩の最悪の敵であり、進歩への途上に横たわる最も忌むべき妨害者ということになろう。で、時世の墮落、人間の無価値、停滞、反動的な動き等について慨歎するすべての人に、次の問題を提起しなければならぬ、——所で、盲人中の目明き、病人中の健康者である君達自身よ、君達は進歩を促進するために何をなしたのか？

この問題に対して、彼等の大部分は、力の弱さ、才能の不足、狭い活動範囲、敵対的諸状況、敵対的環境、敵対的な人々等々を、云い訳の種にする。「我々が活動家になぞなれるものか！、——と彼等は云う——我々はたいした教育も受けなかった、雑誌のちょっとした論説も書けない、神は予言者の雄弁を授けてくれなかった、勤務の場所ときたらちっぽけな所か、それとも勤め口もない有様だ、おじいさんは財産を遺してくれなかった、食うや食わずでいるためにだけでも稼がなくてはならぬ。若し、あれもこれも——財産だの、有力な地位だの、才能——があつたら、我々は思う存分のことをして見せるのだが」。

私は、生涯一片のパン故にもがき苦しむ人々について、語っているのではない。前の書簡で私は彼等に言及した、彼等には何等非難さるべきものはない。若し進歩が、彼等に発達すら与えずにその頭上を通り過ぎたとしても、彼等は単にその犠牲であつたに過ぎない。若し、智的発達に彼等に関連があつたとしても、又若し、より良きものの自覚が彼等の中に虚偽と悪に対する憎悪を燃え立たせたとしても、四囲の状況はこの意識のあらわれを彼等の中に押し殺し、彼等の生活を日々の糧についての煩勞に縛りつけてしまった。若し、このような時にも、彼等が依然として人間的価値を維持したとすれば、彼等は自己の存在と自己の実例によって、進歩の最も精力的な活動家であつた訳だ。何一つ輝かしい事業を成就しなかつたこれらの目立たぬ人類の英雄達に較べれば、いかに偉大な歴史的活動家達と雖も、歴史的意義の点では物の教ではない。若し、前者がいなかつたとすれば、後者は自己の企図を決して何一つ実現し得なかつたであらう。一方で人の目に立つ英雄達がより良きもののために斗い、あまつさえ屢々斗争の中でたおれるような時に、同時に他方では目立たぬ英雄達が、不利諸条件にも拘らず、人間的価値の伝統やより良きものの自覚を社会の中に維持している、そして、偉大な活動家の中の百人中の一人が自己の諸理念の実現に成功した時に、彼が突然自己の周囲に見出すのは、労働で鍛えられ、不動の信念を抱き、且つ悦んで彼に両の手を差し伸べる逞しい人々の集団である。あらゆる偉大な歴史的瞬間に、革新のための基盤はこれらの目立たぬ英雄達から創造される。彼等は一切の未

来の可能性を自己の中に蔵している。彼等が存在しないような社会では、一切の歴史的進歩は即座に停止するだろう。そして、このような社会の其の後の生活は、道徳的な面での社会的動物の生活と何等異なる所がないだろう。

然し、これら精力的な活動家達が有しているのは、唯進歩の**可能性**だけである。進歩の実現は、次のような極めて簡単な理由で、決して彼等には属していないし、又属し得ない、即ち、進歩の実現に取りかかるや、彼等はそれぞれ、飢え死にしたり或いは自己の人間的価値を犠牲にしたりして、いずれの場合にも進歩的活動家達の陣列から消え去ってしまうからである。進歩の実現は、日々の糧についての極めて苦しい煩勞なしに済ますことの出来る人々に属している、然も、これらの人達の中で批判的に思索する**者は総て**、人類の中に進歩を実現することが出来るのだ。

然り、正に総ての者である。願わくは、才能や知識の不足などを口にしないで欲しい。これには、特別な才能も、広汎な知識もいらぬのだ。若し、諸君の才能と知識が現存するものに批判的態度をとり、且つ、進歩の必要を自覚するに足るならば、諸君の才能と知識はこの批判とこの知識を実現するに足るのである。唯、生活がこのための可能性を實際に与えてくれるような機会を一つでも逃してはならない。仮に、諸君の活動が些細なものと仮定しよう、だが、あらゆる物体は量り知れぬ程微細な部分からなっており、いかに巨大な力も無限に小さな衝動から成っているのだ。諸君の活動によって得られた利益の量は、諸君も、又他のいかなる人も評価し得ない、何故ならば、それは、多種多様な状況や予知し得ない多数の条件の結合に依存しているからである。ちょっと見た所ではつまらないものに思われる行為がはかり知れぬ諸結果に拡大成長したように、極めて立派ないくつもの企図が醜惡な諸結果をもたらして来ている。然し我々は、かなり確実に次のことを期し得る、即ち、一連の行為全体に同一の方向を与える時我々は、行為の中には正にこの方向で著るしい結果があらわれるのに好都合な諸条件と合致するものもあるが、所与の方向に全く相反するような結果になることは余りないということである。恐らく我々はこれらの結果を覚り得ないだろう、然し、それらは、我々が出来る限りのことをすれば、必ず**得られる**のである。大地を耕し種を播く農夫は、多くの種子の死滅や、家畜が鼠を踏み荒す被害、凶作、夜盗などから耕地は決して守れないことを知っている、然し彼は、凶作の後でも未来の収穫を当てにして、又も一握りの種子を畑に持ちこむ。若し、批判的に思索する者がそれぞれ絶えず積極的により良きものを志向するようになれば、彼の活動範囲がどんなに狭かろうと、又彼の生活圏がどれ程小さかろうと、彼は進歩の有力な推進者となり、彼の発達に支払われた恐るべき代償の自分の分け前を償なうことになるのである。

所で、活動範囲につまらぬものと重要なものがあるというのは、正しいだろうか？ 人々が進歩の独占権を有しているのは、一体いかなる諸分野でだろうか？ 文学者たちではなかろうか？ 芸術家達ではなかろうか？ 学者達ではなかろうか？

この文学者、進歩論者を観察して見給え、彼は社会の幸福について実に素晴らしく描写している、そして一層巧みに自己の同胞達を搾取したり、或いは自己の面前で彼が奉仕している筈の諸理念を敵達の侮辱に任せている。だが、私はさまざまな《忌わしき群》についてはも早語るまい、この連中にとって文学は、思想の最も忌むべき低下、人間的価値の低下の手段、停滞と社会的墮落の手段なのだから。

この芸術家-進歩論者を観察し給え、彼は検閲機関に参加することが全く嫌いでもない

のに、言論の自由を讃えている、然も自分の仕事場の外では、醜いものが良いものとどう違うかを決して考えたことがない。だが私は、次のような連中——彼等には実に多くの名称があるが——全部については語るまい、彼等は、詩、音楽、絵画、彫刻、建築の創造のつつましやかな階段の上で、恩給とか、勲章とか、高い位階とか、大きな家とかにありつこうと奔めいているだけなのだから。

かの進歩的な教授を観察し給え、彼は、自己の博愛多識から状況次第でどんな方面のためにでも兵器庫を造る用意がある。化学的な入れ換えと分解の諸過程、細胞の増殖と筋肉の収縮、ギリシャ語の語形変化、サンスクリットとゼンド語に於ける音声の変則、アレクサンドル・ニエーフスキー時代とイワン雷帝時代の調度の識別的諸特徴を一生涯研究しつつ、論証と実験の魂のない人間器械に墮した更に多くの者は、次のようなことを決して考えなかつた、——それは彼等の才能と知識が、あまたの世代の苦悩によって購なわれた力であり、彼等がその償ないをしなければならぬものであるということ、この力は彼等に義務を課しているということ、論証と実験は、その時代に達し得る人間的価値の最高点へ学者を導き得るが、全く同様に、人間を蜘蛛と同一の水準に引き下し得るのだというようなことである。

文学も、芸術も、科学も、不道德な無関心主義から人々を救うことはない。それらは、それ自体としては進歩を含んでおらず、その原因ともならない。それらは、唯進歩のために手段を与えるだけである。それらは進歩のために力を蓄える。然し、真に進歩に貢献していると云い得る作家、芸術家或いは学者は、次のような人々だけである、即ち、彼等が獲得した力をその時代の文明の弘布と強化に用いるために出来る限りのことをした者、悪と斗い、自己の芸術的諸理想、科学的諸真理、哲学的諸理念、政論的志向を、時代生活のいぶきに満ちた諸作品の中とか、自己の力量に厳密に一致した行動の中に具現した人々だけである。なす所が少なかった者、個人的な打算のために途中で止めた者、バックスの女の麗わしい頭べのために、滴虫類の興味ある観察のために、文学上の競争者との自尊心に満ちた争論のために、斗争しなければならぬ筈の悪と無学がどれ程巨大であるかを忘れた者は、優雅な芸術家にでも、素晴らしい学者にでも、輝やかしい政論家にでも、お望みのものになることは出来ようが、然し、彼は歴史的進歩の意識的活動家達の陣列から、我と我が身を抹殺したのである。道徳的な意義の点では、人間としては彼は、才能のない三文文士——悪及び無学との斗争についての古くさい真理を、負けず劣らず無能な読者達に、生涯倦むことなく繰り返している三文文士に劣っている。知能の遅れた子供達の頭に、よく分ってもいらない知識を情熱をこめてたたき込む生半可な教師にも劣っている。この人達は自分で出来る限りのことをしたのだ、これ以上彼等に要求すべきものは何一つない。若し百人の読者の中一人か二人でも、僅かながらより才能がありより感受性に富んだ者がいて、三文文士から知った真理を生活に適用するならば、進歩は存在したことになる。若し教師の情熱が、僅かばかりの生徒の中にでも、自分で少しでも思索し働きたいという渴望——知識と労働の渴望——を燃え立たせたならば、ここにも進歩があったのである。先に言及した紳士方が、豊かな芸術的才能、深い学殖、赫々たる政論家的高名を有してはいるが、進歩の全く目につかぬ活動家達——未来のための進歩のあらゆる可能性を自己の中に維持している前述の人々——と比較して、いかに測り知れぬ程低いものであるかについては、私はも早語るまい。

私は芸術並びに科学に関して公正を欠いているといわれるかも知れない。素晴らしい作品は芸術家によって理解されないものであっても、然もなお人類の発展的資産を増大させる。芸術の他の効用はさて置き、人間は、大部分美によってのみ低俗の世界から真理と正義の領域へ移ることが出来る。美は注意を喚起し、感動性を高める、従って、それは、芸術家を鼓舞する思想とは無関係に、既にそれ自体進歩の手段である。全く同様に、知識のあらゆる新らしい事実は、それが現代の生活上の諸問題にとっていかに些細なものであろうとも、人間の思想の資産を増大させる。自然のあらゆる物体を、事実通りあるがままに分類し研究することによってのみ、人間は、人間の幸福に対する関係——大多数者にとってのそれらの効用と害悪——の面で、それらを分類し研究する可能性が得られる。今日は或る昆虫学者が、今まで知られなかった二、三の甲虫が彼のコレクション中にふえたことを喜んでゐるが、暫くしてから、見ると、これら甲虫の一つの研究が、有益な生産物を廉価にする新らしい方法——従って、部分的には大多数者の生活的諸便宜を増大するための方法——を技術家に与えることになる。さてその後、これらの甲虫のもう一つが、動物の諸形態及び諸機能発達諸法則に関する学者の研究の出発点となったとする、——人類もこの法則に従って動物的状态から発展し、この動物的状态から自己の歴史の中に多くの痛ましい経験を宿命的に担ってきたのであって、この諸法則は、自己の発達のために闘うことによってのみ、人間は自己の不可避的な動物的要素と並んで、彼に進歩の活動家となることを可能にする他の要素をも、自己の中に作り出し得るのだということを、人間に教えるものである。今日一人の言語学者が、古代語の動詞変化の特殊性に気付いて狂喜したとすれば、翌日に於てはこの特殊性は、それ迄別々であった若干の諸言語を連関づけ、又その次の日には、この連関が先史時代の一連の神話を解明することになり、とかくする中に、キリスト教々会の教義に与えたこれら神話の影響を跡づける可能性が生じ、大多数者の思想構造が少数者により明瞭になり、従って、発展してゆく進歩的活動のための諸手段を見出すことが一層便利になる。芸術と科学は、それらの所産に於ては、芸術家及び学者の気分や志向とは無関係に、彼等の希望に反してまでも、進歩の手段なのである。芸術作品が真に芸術的でありさえすれば、学者の発見が真に科学的でありさえすれば、——それらは完全に進歩に属していることになる。

私は、芸術と科学が進歩の手段でないとか、又芸術作品と科学的発見が諸事実として進歩に貢献しないとか、云うつもりはない。然し、地中に蔵されている金属も、蚕によって造られる絹も、矢張り進歩の手段であり、進歩のための諸事実であるということは、明白である。芸術のみを念頭に置くだけで、その人間的な影響について決して考えない芸術家が、巨大な美的力をあらわすこともあろう。彼の作品は素晴らしく、彼の影響は巨大であり、極めて有益でさえあるかも知れぬ。然し、道徳的価値の点では、彼の力は、大地に銅の自然鉱を撒き散らしたり、湖沼に鉄を含有せしめたかの巨大な力より、勿論高くはない。一方人間の文明にとっての金属の利益に関しては、何人も異論をさしはさまないだろう。美的力は、それ自体では決して道徳的ではない力である。美的力が、芸術家とは無関係に道徳的、文明的、進歩的な力となるのは、素晴らしい作品によって鼓舞されて善に接近した人の頭脳の中に於てであり、芸術家の作品から受けた感銘の影響によって一層良くなり、一層感受性に富み、一層発達し、一層精力的、活動的になった者に於てである、それは恰かも、金属から最初の有益な道具を考案した者の頭脳の中でのみ、金属が文明的な

力になったのと同じである。芸術家としての芸術家は、何等人間的意義を持たぬ強力な肉体的或いは有機的過程と同じレベルにある。音声も血液の循環も、思想、善の願望、事業に対する決意の源泉として役立つが、それ自体は思想でも善でも決意でもない。芸術家**自身**が文明的な力たるためには、彼はそのために**自から**自己の諸作品の中に人間的なものを投入しなければならず、進歩の源泉と進歩を実現せんとする決意を身につけなければならず、進歩的な思想に満ちた仕事に取りかからなければならない。そうすれば、彼は努めずとも創造の過程で意識的な歴史的活動家になる訳である、何故ならば、彼が追求する美の理想を通して、彼にとっても真理と正義の要求が常に輝き出るのであるからである。彼は悪に対する斗争を忘れないだろう、この斗争は各人の義務であり、彼が天成の力をより多く持っていればいる程、益々多く彼の義務となるのである。

学者についても同様のことが云える。知識の蓄積は、それ自体としては、蜂房に於ける蜜蠟の蓄積より高い道徳的意義を少しも有していない。然し、蜜蠟は、養蜂家の手、技術家の手に於て文明の手段となる。彼等は蜂に大いに感謝し、非常に大事にし、且つ蜂がいなかったら蜜蠟もないのだということも知っている。然し、蜂は矢張り人間ではない、蜂を文明の道徳的活動家と呼ぶ訳にはゆかぬ、そして彼等の内的欲求による蜜蠟の分泌も進歩の**材料**に過ぎない。甲虫を蒐集する昆虫学者や動詞の変化を指摘する言語学者は、若しも彼等が甲虫のコレクションを観察したり、或いは動詞がこのように変化するということが知られたりする内的満足のためにだけこうしたことをしていようとすれば、蜜蠟の小さな塊を分泌する蜂達よりも決して低くはないが——その代り高くもないのだ。若しこの小さな塊が、それを蜜蠟膏に変ずる技術者やその助けを借りて新らしい一般的法則を発見する化学者の手に入るならば、この塊は文明の材料になるだろう。が、若しそれが、陽にさらされて無益に溶けてしまえば、蜂の仕事は進歩にとって無に帰したことになる訳である。然し、この両方の場合とも、蜂はそれに何の関係もない。蜂は自己の欲求を満足させ、食物を蜜蠟の小塊に作り変え、この小塊を然るべく自己の建築場へ運び、それから新らしい食物を求めて飛び去った。これと同じように、知識の事実も、唯二つの経路で文明の手段となる。第一に、技術或いは一般的思想の面でその事実を利用する者の頭脳の中に於て、第二に、科学の事実を作り上げる者自身の頭脳の中に於てである、但し、後者は事実を観察する満足のために、蜜蠟の新らしい小塊としてではなくて、あらかじめ熟考した目的を持って、一定の技術的应用或いは一定の科学的、哲学的一般化を考慮する材料としてでなければならない。科学と芸術は、強力な進歩の手段である、然し、私がこの書簡の始めにも述べたことだが、進歩は、諸個人に於てのみ実現され、諸個人のみが進歩の推進者となり得る。だがこの意味では、個人としての芸術家と学者は、進歩の強力な活動家でないことがあり得るのみならず、その才能と知識にも拘らず、何人も道徳性を要求しない無意識的な金属又は動物と等しく完全に進歩的運動の圏外にも立ち得るのである。其の他の人々で才能と学問は不足かも知れないが**真実**の人間が、恐らく、偉大な芸術家達と偉大な努力家達の蓄積した材料に人間的な意義を付与し得、**自分なりの**理解によってこれらの業績に人間的な意義を付与することだろう。そして、**彼等**は、これらの業績を歴史の進歩の中に持ち込むことだろう。

私は以上文明の最も強力な諸要素としての科学と芸術について詳述したが、これは、これらの領域も、それ自体としては進歩的な過程をなすものではないということ、才能も知

識も、なおそれ自体としては、人間を進歩の推進者にはしないということ、この点で才能と知識はより少なくとも、出来るだけのことをすれば、より多くのことをなし得るのだということを、指摘するために故意にしたことであった。事実、ここに今一度くり返しておくが、批判的に思索し、自己の思想を実生活に具体化しようと決意する人間は全部、進歩の活動家たり得るのである。(未完)